

高知県安芸市清近岡遺跡発掘調査報告書

岡本健児 宅間一之



昭和54年3月31日

高知県安芸市教育委員会

はじめに

私たちの郷土、安芸市には、先人の生活の跡が多く遺され郷土の遺産として大切に保存されていますが、埋もれているこれらの遺産もまだまだ多くあることが推測されるようです。

今回の清近岡遺跡は、住宅団地造成のため開発した際に発見されたもので、安芸平野が一望できる丘にあります。

安芸平野は、三方を山に囲まれていますがその山礎には、土器、石斧、石剣、銅鐸、銅鉢などが発見され、また一ノ宮古墳や数々の考古遺跡もみられます。

清近岡遺跡は、高知女子大学岡本健児教授。高知ろう学校広田典夫先生。高知県教育委員会文化振興課、宅間一之先生に発掘を依頼し、ご協力を得て調査をしていただきました。発掘の進むにつれ弥生後期の住居跡や土塙墓、土器群が発見され、先人の生活が身近なことのように偲ばれたことでした。

その後先生方のご研究をもとに『安芸市清近岡遺跡発掘調査報告書』として纏めていただきました。現地保存の困難性から出土品と共に記録として保存し後世に伝えることになりますかと思います。いつまでもこれら資料が現地保存にかかる貴重な資料となることを念じます。

終りに、報告書作成にいたるまで非常なご繁忙にもかかわらずご協力いただきました先生方に対し厚くお礼を申し上げましてご挨拶といたします。

昭和54年3月31日

安芸市教育長 楠村銀助

例　　言

1. 本報告書は、安芸市振興計画に基づき実施される一の宮団地造成工事に伴い、安芸市教育委員会が、岡本健児高知女子大学教授及び県教育委員会文化振興課の指導により実施した発掘調査の報告書である。
2. 調査は岡本健児高知女子大教授が担当したが、現地調査には広田典夫（県立高知ろう学校教諭）宅間一之（高知県教育委員会文化振興課埋蔵文化財担当主事）鈴木省一（早稲田大学文学部学生）岡本桂典（立正大学文学部学生）井本葉子（国学院大学文学部学生）井上正隆（高知大学人文学部学生）広田佳久（立正大学文学部学生）があたった。昭和53年4月1日～4月5日までの間は現地における調査を、またそれ以降出土遺物、図面整理を行い作業を完了した。
3. 本報告書の編集は宅間一之が担当し、執筆には岡本健児（第2章～第4章）、宅間一之（第1章）があたり、整理・製図は、岡本健児、岡本桂典、山本楨（立正大学文学部学生）、鈴木省一、井本葉子、井上正隆、広田佳久があたった。また写真は宅間一之が担当した。
4. 発掘調査の事務は安芸市教育委員会が担当し、包国浩三、有沢蕃、徳久研二がこれにあたった。また調査協力者として長山久子・久保和枝・岡林功・福島依恵子・本田玲子・桑尾美賀・大寺真理子・西岡その氏らの協力を得た。

本文目次

はじめに	
例　　言	
第1章　序	
I　調査にいたる経過	1
II　位置と環境	2
第2章　清近岡の遺構	
I　A地区の土壙群	5
II　竪穴式遺構	9
III　土器群	10
IV　濠の一部	11
V　D、E地区	13
第3章　出土遺物	
I　土壙墓とその周辺出土の土器群	14
II　B-1区出土の遺物	22
1　表面採集の弥生土器	22
2　第1層（表土層）出土の土器群	24
3　第2層黒色土層（竪穴状遺構上部）出土の土器群	28
4　第3層竪穴状遺構内の黒褐色土層出土土器群	32
5　竪穴状遺構床面出土の遺物群	33
III　B-2区上層（黒色土層）出土の土器群	40
IV　濠出土の土器	46
第4章　考　察	48

挿 図 目 次

第1図	清近岡遺跡と周辺遺跡分布図	3
第2図	清近岡遺跡周辺地形図および発掘地点図	5
第3図	A・B・C各発掘区図	6
第4図	土壤墓群(A)と竪穴状遺構(B-1)・土器溜(B-2)図	6
第5図	土壤墓1実測図	6
第6図	土壤墓2実測図	7
第7図	土壤墓3・4実測図	8
第8図	竪穴状遺構実測図	9
第9図	C発掘区北側東西セクション図	11
第10図	C発掘区における南側東西セクション図	11
第11図	A-5地点出土の龍河洞式土器実測図	15
第12図	A地点出土の龍河洞式土器実測図	14
第13図	土壤墓4出土の土器群(龍河洞式土器・土師質土器・ヒビノキII式土器)実測図	16
第14図	土壤墓周辺発見の土器(龍河洞式土器・ヒビノキII式土器)実測図	17
第15図	B-1区表面採集の弥生土器1実測図	22
第16図	B-1区表面採集の弥生土器2実測図	23
第17図	B-1区第1層出土土器実測図	25
第18図	B-1区第1層出土のヒビノキI式土器実測図	26
第19図	B-1区第1層出土のヒビノキI式・II式土器実測図	27
第20図	B-1区第1層出土のヒビノキII式土器・中世土器実測図	28
第21図	B-1区第2層出土の龍河洞式土器実測図	29
第22図	B-1区第2層出土の土器群実測図	30
第23図	B-1区第2層出土のヒビノキII式土器実測図	31
第24図	B-1区第2層出土のヒビノキII式土器実測図	32
第25図	竪穴状遺構床面出土の弥生土器実測図その1	34
第26図	竪穴状遺構床面出土の弥生土器実測図その2	34
第27図	竪穴状遺構床面出土の弥生土器実測図その3	35
第28図	竪穴状遺構床面出土の弥生土器実測図その4	36
第29図	竪穴状遺構床面出土の砥石実測図	37
第30図	竪穴状遺構床面出土の打割石庖丁と叩石実測図	38
第31図	竪穴状遺構床面出土の石器工作台(台石)実測図	38
第32図	B-2区上層出土の土器実測図その1	40
第33図	B-2区上層出土の土器実測図その2	42
第34図	B-2区上層出土の土器実測図その3	42
第35図	B-2区上層出土の土器実測図その4	43
第36図	B-2区上層出土の土器実測図その5	43
第37図	B-2区上層出土の土器実測図その6	44
第38図	漆内出土の土器実測図	46

図 版 目 次

図版 1	遺跡遠景	51
図版 2	発掘前の状況・発掘地区全景	52
図版 3	A 発掘区土壙群・土壙墓 1	53
図版 4	高坏型坏部破片出土状況・高坏型土器脚部出土状況	54
図版 5	土壙墓 2、3 及び高坏型土器脚部出土状況・土壙墓 3、4	55
図版 6	竪穴状遺構発掘状況・竪穴状遺構	56
図版 7	石器工作台石出土状況・砥石出土状況	58
図版 8	叩石出土状況・ヒビノキ式土器底部出土状況	59
図版 9	竪穴状遺構トレンチ調査・土壙群及び竪穴状遺構全景	60
図版 10	B - 2 区土器窓	61
図版 11	漆断面・E 区発掘状況	62
図版 12	壺形土器（龍河洞式）	63
図版 13	壺形土器頭部・壺形土器範みがき手法	64
図版 14	壺形土器窓削り手法・拡大図	65
図版 15	龍河洞式土器口縁部・龍河洞式土器底部	66
図版 16	龍河洞式土器底部（外面研磨）・龍河洞式土器底部（内面窓削り）	67
図版 17	高坏形土器・高坏形土器口縁部凹線文	68
図版 18	高坏形土器脚部	69
図版 19	高坏形土器脚台部（土壙墓 3 出土）	71
図版 20	高坏形土器脚部（ヒビノキ I 式土器）	72
図版 21	須恵器（竪穴状遺構上部出土）	73
図版 22	小型粗形土器	74
図版 23	砥石・叩石（竪穴状遺構出土）	75
図版 24	台石（竪穴状遺構出土）	76
図版 25	打削石庖丁（竪穴状遺構出土）	77
図版 26	瓦器と土師質土器（B - 2 区出土）	78

第1章 序

1. 調査にいたる経過

安芸市井ノ口清近岡は、安芸市土地開発公社が、安芸市振興計画に基き、一の宮団地造成のため買取し開発をすすめ、すでに12軒の住宅と1棟の集会所が完成している。この造成工事中に、安芸市役所職員や、角谷和男氏（高知西高校教諭、県文化財パトロール委員）らによって弥生中・末期の土器片等が発見されており、周知の埋蔵文化財包蔵地として認知されていた。

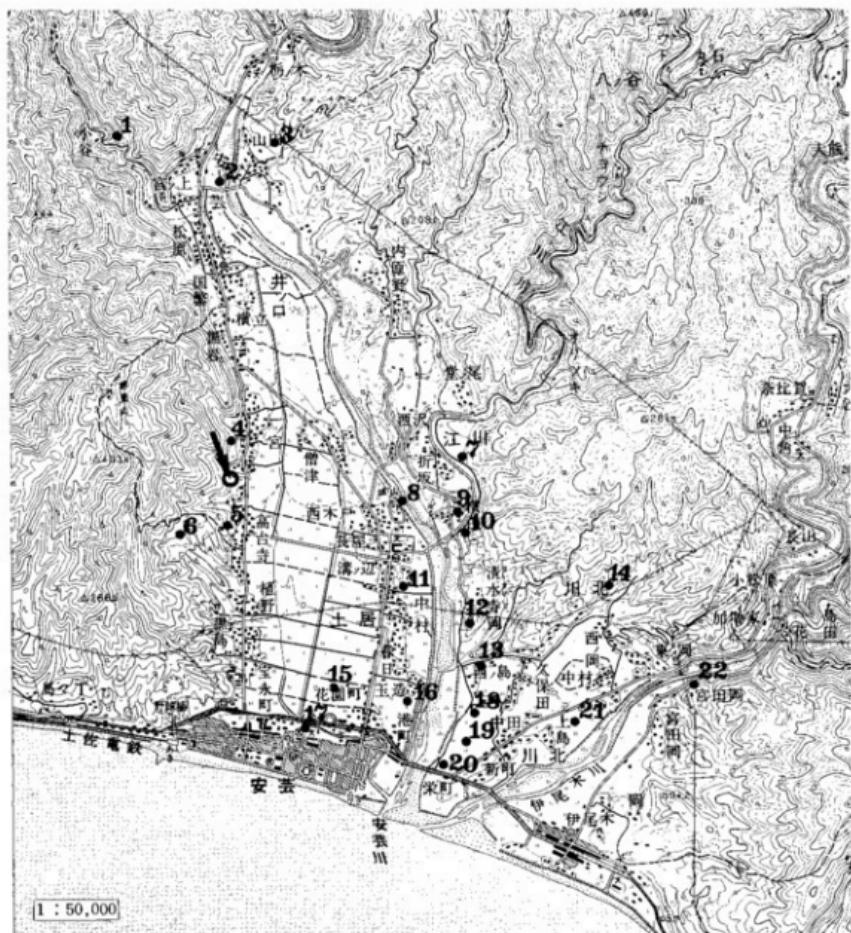
安芸市土地開発公社は、本年度残存している用地の内900平方メートルを開発する計画があった。このため、昭和53年2月22日、岡本健児高知女子大教授と宅間一之県教育委員会文化振興課主事が現地において、包国浩三安芸市教育委員会社会教育課長・安芸市企画課、及び安芸市土地開発公社から開発計画の説明をうけ協議した。この結果、安芸市教育委員会が事業主体となって、昭和53年4月1日より緊急発掘調査を実施することとなった。

2. 位置と環境

今回、発掘調査を実施した清近岡遺跡は、海岸線よりおよそ2.5キロの地点で、安芸市井ノ口清近岡1143-1に所在する。標高448メートルの妙見山の東麓で、標高72メートル附近から東西60メートル、南北150メートルの広さで、標高60メートル附近までゆるやかな傾斜をもつ丘陵端部に立地する。遺跡の所在する附近からは、安芸平野から川北、さらに太平洋まで一望することができる。（第1図）

また、本遺跡の所在する妙見山東麓の丘陵地や、東にひらける安芸川の沖積平野、さらにその東の清水寺岡の丘陵や川北にかけての地域は、旧石器時代から現代に至る諸遺跡が分布している。

現在、旧石器時代の遺跡としては、尖頭器と翼状はく片が出土している清水寺岡遺跡がある。本遺跡からは、安芸平野をへだておよそ2.5キロの東方であるが、本遺跡からは容易に望見することができる。清水ヶ丘中学校敷地造成中に発見されたこのサヌカイト製石器は、「けい光X線法」による鑑定で、香川県国分台産のサヌカイトで、県内最古の石器と確認された。香川県から徳島を通り、剣山山系をこえて川沿いに安芸市へ通じるサヌカイ



第1図 清近岡遺跡と周辺の遺跡

清近岡遺跡と周辺の遺跡

	遺跡名	出土遺物
1	小谷遺跡	石斧
2	宮ノ上遺跡	石斧
3	山田遺跡	土器片(弥生)
4	一ノ宮古墳	环、馬具、銀環
5	高台寺遺跡	磨製石斧
6	高台寺古墓	骨壺、刀子残欠
7	日林坊遺跡	壺棺
8	土居遺跡	土器片(弥生)
9	横山古墳	石斧、石鎌、石庖丁
10	江川遺跡	銅鋸、石斧
11	上中遺跡	土器片(弥生)
12	清水寺ヶ丘遺跡	磨製石斧、翼状剝片、石鎌
13	西ノ島遺跡	杭木、有蓋高坏、弥生住居址?
14	八坂遺跡	有柄石劍(弥生中期)
15	河原田遺跡	土器片
16	金政遺跡	土器片
17	江ノ川畔遺跡	土器片(弥生)
18	廐尻遺跡	片袖木製スキ、石鎌、勾玉
19	横田遺跡	有蓋高坏、石鎌
20	安芸橋遺跡	土器片(弥生)
21	上島遺跡	土器片(弥生)
22	伊尾木遺跡	銅鋸、柱状抉入片刃石斧

トの道が推定でき、1万4000年以前の住民の移住経路をたどることができる。

弥生時代に入ると、井ノ口地区では本遺跡や山田、小谷、宮ノ上、川北地区では、江川、横山、八坂、西ノ島の各遺跡が安芸沖積平野をとり囲むように点在する。このことは、本格的な水田開発に伴い、稲作農耕を生活軸とした集落が、安芸沖積平野近辺に営まれ、しだいに安定した生活基盤が培かれていったことを証するものであろう。また弥生中期ともなれば、定着した稲作を維持するためにも、水利を背景とした利害的な集落関係から祭りの行為も行なわれている。伊尾木切畑の伊尾遺跡出土の銅鋸、あるいは川北八坂遺跡出土の有柄石劍、江川出土の銅鋸がそれを物語る遺物であろう。

古墳時代になると、7世紀後半に井ノ口の宮古墳が築造されている。標高20メートルの緩丘陵地ではあるが、南北に開けた安芸平野を一望できる。広口壺、短口壺、台付長頭壺、環等の土器類の他、馬具、銀環が出土している。由緒ある一の宮神社の近辺でもあり安芸の国造の存在も推測することができる。

律令時代をむかえ、安芸平野にも条里制が施行され、大規模な土地整備、灌漑事業が展

開されて、本格的な稻作が行なわれ住民生活は安定したと思われる。「一の坪」「ロクノ坪」「辰巳ヶ坪」などの条里地名が現存する。

10世紀前半の「和名抄」には安芸平野に4郷の記載がある。玉造、黒鳥、丹生、布師である。その郷名からそれぞれの生産にたづさわる職人団の居住が推定でき、本地区が古代集落の集中地帯として、およそ6000人の人々の生活圏が形成された地域であるといふこともいえる。

第2章 清近岡の遺構

第2図は清近岡遺跡周辺の地形図であるが、遺跡発見は地形図東方にならんでいる13軒の人家群である一の宮団地が出来上ってからである。発掘調査の結果から、この団地造成の時に、この地方の第Ⅳ様式とみられる龍河洞式土器を伴出する土壙墓群の大半が工事で無意識のうちに破壊されたと思われる。

われわれが発掘した地点は、第2図に示すA～Eまでの5地点であるが、(図版2)、A地点からは土壙墓群と壺棺墓、B地点からは竪穴状遺構と後世の土器窯が発見された。また竪穴状遺構の発見された地点から、南に33m離れたところであるC地点からは環濠が発見された。



第2図 清近岡遺跡周辺地形図および発掘地点図

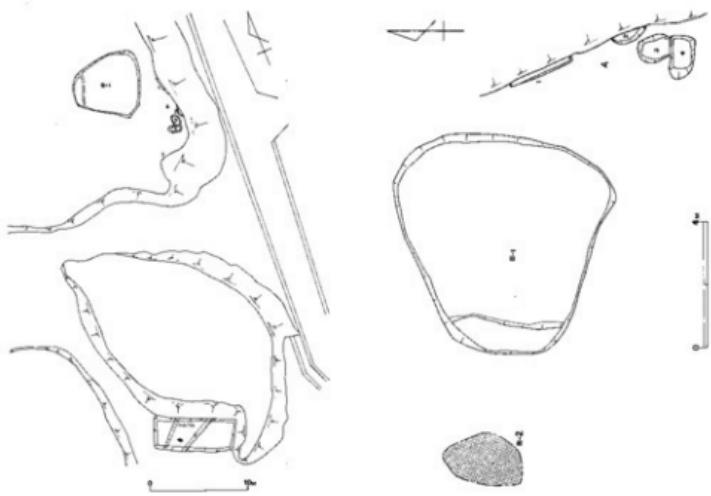
I. A地区の土壙墓群 (第4図・図版③)

第3図・第4図にみるようにA地区には、4基の土壙墓が発見されている。この4基の土壙墓に対して、北東から順に土壙墓1・2・3・4と命名している。

土壙墓1は土壙墓2と同様に、一の宮団地造成の際、山丘を切り開き、それによってこの二つの土壙墓をほとんど切り取っている。しかし残存しているわずかな部分でもって、これら二つの土壙墓を明確にすることができた。

土壙墓1 (第4図・第5図・図版③)

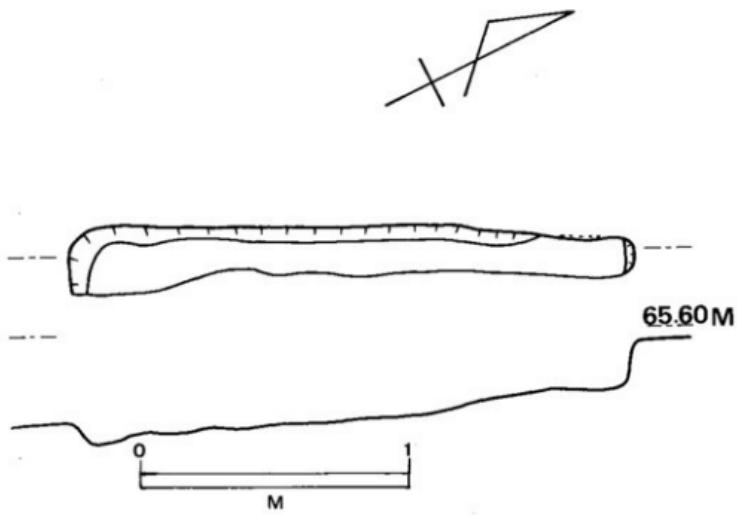
本土壙墓は主軸方向N-30°-Eを測る。深さは地山小砾混じりの黄褐色土層を10cm-20cm程掘り込み、残存している土壙墓の幅は14cm-26cmである。長軸の長さは削り取られていないので明確であり、その長さは2.14mである。この土壙墓は残存の部分から推して、長方形であり、しかも西南に向ってわずかに傾斜するものである。本土壙墓内の西南末端に近い地点より大形高环の坏部破片(第12図2)が出土し、その西南末端部より約30cm離



第3図 A・B・C各発掘区 (Aは土壤基群、
B-1は竪穴状造構、Cは漆)



第4図 土壤基群(A)と竪穴状造構(B-1)
土器漆(B-2)

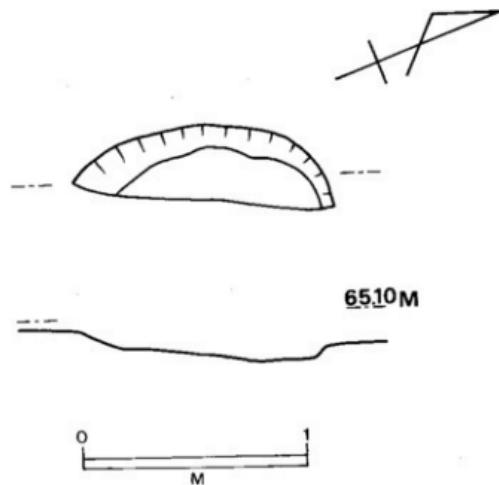


第5図 土壤基I実測図

れた土壙墓外よりは高環形土器脚部（第12図3）が出土している。図版4はその出土状況である。この2個の高環形土器は本地方の龍河洞式土器である。

土壙墓2（第6図）

土壙墓1の南部に土壙墓2がある。土壙墓1に比較して土壙墓2の標高差は50cm程度で、土壙墓2が低いところにある。土壙墓2の長軸の方向は、土壙墓1とまったく同一である。ただこの土壙墓は楕円形をとり、その3分の1程度しか残存していない。残存部の最長は1.14mである。この土壙墓からは、土器片は発見されていない。

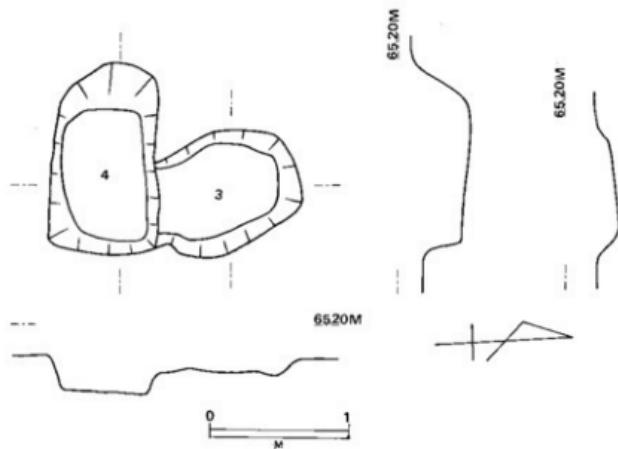


第6図 土壙墓2実測図

土壙墓3（第7図）

土壙墓2の西部に接して土壙墓3がある。土壙墓3は土壙墓4にその一部が切られている。土壙墓3はその主軸方向が土壙墓1・2とまったく同一方向である。土壙墓3は隅丸の長方形といった方がよい。長軸の残存の長さ1m、短軸の長さは86cmである。断面は舟底形を呈す。本土壙墓より出土した土器は、土壙墓1と同じく龍河洞式土器の大形高環形土器の脚部である。（第12図4）土壙墓の北部より出土している。掘り込みは浅く、地山小礫混じりの黄褐色土層を8~18cm程度さげているにすぎない。

土壙墓4（第7図・図版⑤）



第7図 土塙墓3・4実測図

4基出土した土塙墓のうちでは、最も完全な形態のできるものである。この土塙墓は変形の長方形であり、長軸はN-90°-Wである。この点では土塙墓1・2・3とは、その長軸方向を異にするものである。またこの土塙墓は、土塙墓3を切り込んでいるので、土塙墓3がこの土塙墓よりも時期的に先行する。長軸の長さ1.4m、短軸の長さ70cmで、深さ28cmである。床面は平坦であるが、壁は70°程の立ちあがりを示す。断面は舟底形といったがよからう。先述した土塙墓1・2・3と同様に地山の小礫混じりの黄褐色粘土層を切り込んで作ったものである。第13図の土器群は、土塙墓4に関連した土器片である。第13図7は、第V様式（新）段階のヒビノキII式瓈形土器の口縁部で、土塙墓4の直上にあった土器片である。第13図の6は土塙墓4をすこし掘って出土した土師質土器（かわらけ）であって、この土塙が掘りはじめに方形を呈していたことと、この土師質土器の出土から発掘当初は室町時代の木棺埋葬の土塙と考えたくらいである。第13図1～5は龍河洞式土器の壺形や瓈形であり、またその底部である。これらの土器の一部（第13図1と5）は、土塙墓の東側の隅より出土し（図版5）、その位置から壺形であったとも考えられる。また他の龍河洞式土器は、土塙墓底部中央から出土しているので、あるいは副葬の土器とも考えられる。

これらの土塙墓に関連して、土塙4の西南3mの崖ぶちの5地点(第3図)から1個の壺棺(図版12)が発見されている。この壺棺の発見は本遺跡の発見につながるものである。この壺棺は第11図の龍河洞式壺形土器に、同じ龍河洞式土器高环坏部(第12図の1)を反対にして蓋としたものである。この壺棺発掘地点は、本発掘の段階ではすでに盜掘などを受けて、その周辺部は消滅していた。

なおA地区における土層は、表土層淡黒褐色土層、第2層は黒色土層であり、第3層黒褐色土層である。この第3層の下に地山層の黄褐色土層がある。土塙墓はこの地山層を掘り抜いて作っている。また土塙墓に落ち込んでいた土は、第2層の黒色土であるので、土塙墓は第3層と地山層の黄褐色土層をくり抜いて作ったと考えてよかろう。土塙墓周辺の第3層黒褐色土層の深さは約10cmであるので、土塙墓の本来の深さはこの10cmを考慮に入れなければならない。ただ第2層の黒色土層と第3層の黒褐色土層の識別はむつかしい。

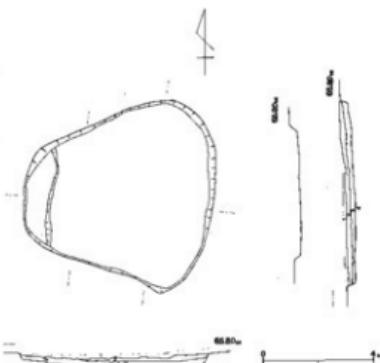
II. 竪穴状遺構(第8図・図版6)

B地区、それもB-1区から次に紹介する
竪穴状遺構が発見されている。

B-1区の表土層淡黒褐色土層をはいだところ、円形の径6m前後の黒色土層の落ち込みを発見した。従来このような落ち込みは、本地方では竪穴住居の発見につながるものである。その掘り下げを試みた。

その結果第8図に示すような竪穴状遺構を発見した。平面形はいわゆる“お多福”的形ともいるべき変形のものである。東部が幅広くなっている。東西の最大幅7m、南北中央部で5m、南北最大幅で7mとなる。壁高は20~40cmで、壁の傾斜は25°~30°程度である。また竪穴状遺構の西部においては、高さ10cm程度のベット状の如き遺構の部分もみられる。

竪穴状遺構内における土層の堆積は層位がみられ、第8図に示すようにその第1層は表土層である淡黒褐色土層、そして第2層が黒色土層であり、第3層は黒褐色土層である。第



第8図 竪穴状遺構実測図

2層と第3層ともに遺物包含層である。特に竪穴状遺構内の黒色土層（第2層）に含まれた遺物は、後述するが如く土器片に限定される。土器片としては弥生第IV様式である龍河洞式土器片、弥生第V様式（新）であるヒビノキII式土器、そして古墳時代終末～奈良時代のものとみられる須恵器變形の破片が出土している。さらに第3層黒褐色土層から出土した遺物は、これも後に詳述するが石器と土器片が発見されている。土器片は少量の龍河洞式土器と多量のヒビノキII式土器が出土し、後者のヒビノキII式土器に伴なう石器として、第3層の最下層から石器工作台（図版7）・砥石（図版7）・叩石（図版8）が出土している。

この竪穴状遺構は、第3層下の茶褐色土層（第4層）を床面としました壁面とする。なおこの床面下を確認するため、竪穴状遺構の東西に幅50cmのトレンチを入れたところ（図版9）、この第4層茶褐色土層は深さ20～25cmで地山層の小礫混じりの黄褐色土層にいたることが判った。なおこの第4層茶褐色土層は、土壤墓群の多くみられるA地区には分布せず、また無遺物層である。

この竪穴状遺構については、考察の章で詳しく論述する。

III. 土器窯（第4図）

B地区の西部をB-2区とし、この部分の発掘も実施した。とくにこの地区での遺構確認につとめたが、確認はできなかった。ただ遺物包含層と、とくに土器が多く堆積した土器窯とみられる部分（図版10）が発見された。この土器窯とみられる部分は、東西4m、南北6.5mの楕円形の範囲であって、第2層の黒色土層内に限定された。この地区から出土した土器群は、この地方の弥生第III様式（新）の北カリヤ（朝倉）式土器、弥生第IV様式の龍河洞式土器、弥生第V様式（中）のヒビノキI式土器、弥生第V様式（新）のヒビノキII式土器、さらに鎌倉時代のものとみられる瓦器碗破片、室町時代の土師質土器（通称かわらけ）も出土している。以上の各時期の土器のうち、量的に最も多いのはヒビノキII式土器であり、それについてヒビノキI式土器、そして龍河洞式土器である。中世の土器は細片になっているが、龍河洞式土器について出土量がみられた。北カリヤ式土器片は数片発見されているにすぎない。

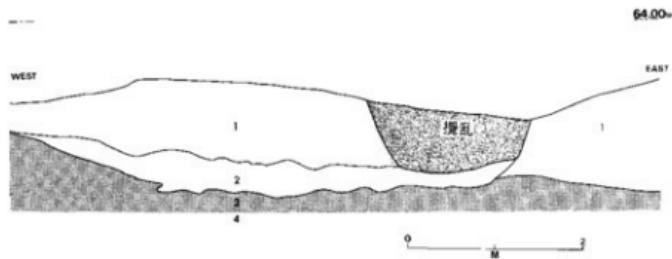
B-2区の土器窯とみられる個所からは、以上の各時期の各型式土器が混在して発見され、いわばその事実から中世における清近丘の開墾時に再堆積された土器群ということを推定せしめる。このことは、これらの土器群のなかに中世の瓦器・土師質土器が混在する

ことによって言えることである。

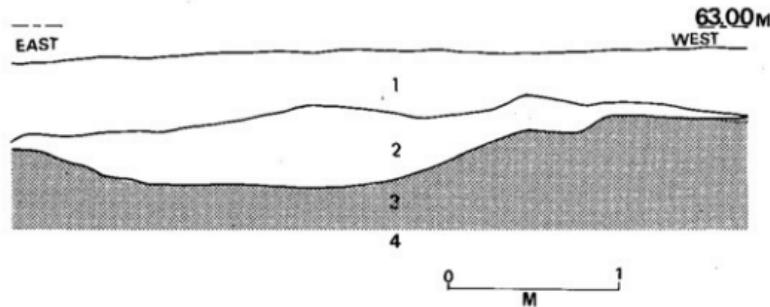
IV. 濠の一部 (第9図・第10図・図版11)

C地区は清近丘陵が大きくこれから山麓に向って傾斜しようとする個所である。A地区B地区の標高が約65mであるが、C地区の標高は約63mである。そしてC地区から100m離れた山麓の標高は50mである。あるいはこの部分に、濠の一部が残存していないかという意味で発掘したのがこの地区である。

C地区の発掘は地形の関係で、3m×8mのトレンチ掘りをした。ただその場合、発掘トレンチの南北の直線をN-30°-Eとして試みた。



第9図 C発掘区北側東西セクション図



第10図 C発掘区における南側東西セクション図

この地区的発掘の結果は、表土層（黒褐色土層—第1層）の堆積が他の発掘区よりも厚い。第9図は発掘区北側の東西セクション図である。これをみて表土層は30~113cmという厚さである。第9図で注意すべきことは、そのセクション図で東側に当たる部分に、擾乱層がみられることである。

このような表土層の堆積が他の地区よりも多いのは、この地区的傾斜が強いこともあるが、それよりもこの地区が清近丘台地の舌状部にあるためとみなければなるまい。第9図にみる第2層は、シルト質黒色土層である。この第2層には多くの土器を包含している。もちろん表土層の黒褐色土層にも少量の土器を包含しているが、第2層ほど多くない。第2層で出土した土器片は龍河洞式土器である。これに対して表土層出土の土器片はヒビノキII式土器である。このことは第2層の形成や第2層を遺構として取らえる時、遺構の性格を知るための重要なポイントとなる。

第2層シルト質黒色土層下の第3層は小礫混じりの黒褐色土層である。この第3層は土器をまったく含有しない。なおこの第3層の下の第4層は小礫混じりの黄褐色土層であり、いわゆる地山層であり、第5層は岩塊混じりの砂礫層となる。なおここで第3層と第4層を分離してみているが、この二層は本来同じ地山層であったものである。第3層いわゆる地山層の上部は第2層のシルト質黒色土層の水溶土が浸透してきたものである。

このようなC発掘区北側東西セクションにみられる層位関係は、C発掘区南側東西セクション（第10図）にもみられる。

ここで問題になってくるのは、地山層（第3層を含む）にのっかっている第2層のシルト質黒色土層をどのように把握するかである。結局C地区発掘の結果から、この第2層はN-22°-EからN-44°-Eという方向に向けて走っている事は事実である。（第3図）そしてこの第2層がシルト質という事と、第3層に水溶土が浸透していること、さらに第2層の堆積末端部に溢水によって生じたものがみられることなどから、この第2層はその堆積前においては濠的な役割を演じていたとみなさざるを得ない。

この濠的な存在は、C発掘区において北側の底面と南側の底面の高さを比較した場合、南側の最底面が高くて（標高62.4m）、北側の最底面が低い。（標高62m）よってこの濠の水流は南西から北東へ向って流れていったであろう。またこの濠的なものは、C発掘区南側では幅2.4m、深さ50cmであり、北側では幅4mであり深さ40cmである。そしてこれを自然に出来た水流路と考えるには、その地形からみて不自然であり、人工的に作った濠の一部としなければなるまい。ただその場合この濠は、地形的に清近岡台地の舌状部にあ

るので、清近丘全部をめぐったものでなく、ごく一部この舌状部の部分だけに作ったのであろう。この濠の作られた時期と濠の性格については考察の章で詳述しよう。

なおこの濠はC発掘区でやっと確認できたものであって、その北部の土盛りは一の宮団地造成時に運んできた土砂であり、その南部は深く切り取られて遺構—濠—の確認のでき難い状況にあったことを申し添えておきたい。

V. D・E地区（第2図・図版11）

D地区は10m×8mの範囲に発掘を行ったが、発掘の結果この地区に盛りあげた土砂は第2次堆積のもので、一の宮団地が造成される時に持ち込まれたものと判明した。この地区の発掘では、ほとんど遺物の発見はなかった。

E地区は12m×8mの範囲に発掘をする。ところどころに盗掘の土壤をみる地区であるし、すでに表土層は欠失し第2層の黒土層が露出している地区である。発掘は遺構確認のため精査したが、E地区全面の第2層黒土層の堆積が10cm程度であることが判明した。これはこの地区的表土層と第2層の一部が、一の宮団地造成の際に削り取られていることを物語っている。またこの地区的西部を特に精査したが、西の方に行くに従って20cm大の礫が多く第2層黒色土層に含まれるようになる。この状況はB地区的発掘でもみられたことである。このE地区・B地区的西部がこのように自然礫を多く第2層黒色土層内にみると、かつてE地区的西端・B地区的西端近くまで、山丘がせまっていたことを示すものでなかろうか。今日では山丘はずっと西方にあり、ほとんどが畠になっているが、これは中世以降の開拓によって今日のようになったものとみてよからう。

このE地区的発掘によって、発掘区のB地区・E地区的西部には包含層の存在しないことが判明した。

E地区出土の遺物は土器片のみ数片である。それも叩目のある土器片で、ヒビノキII式土器の謎形破片とみられる。

第3章 出土遺物

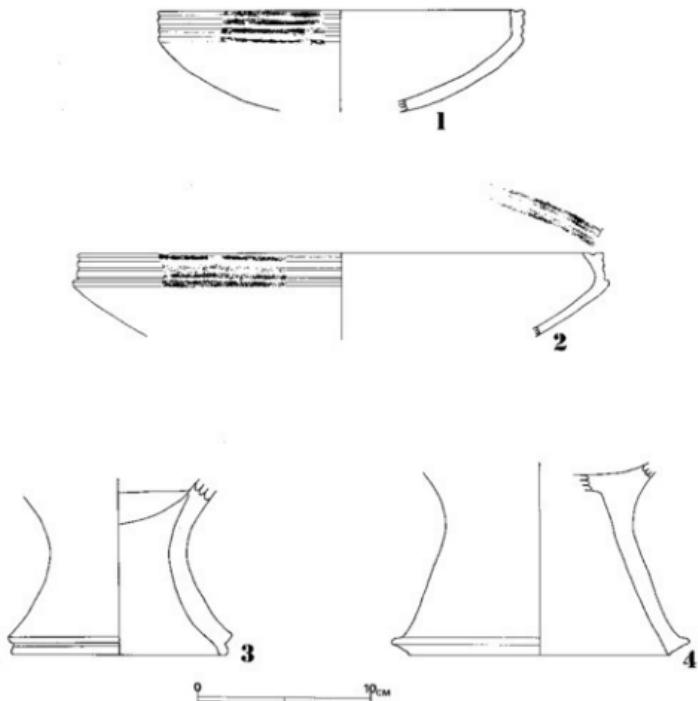
I. 土塙墓とその周辺出土の土器群 (第11図～第14図・図版12～20)

土塙墓およびその周辺から出土した土器群は、型式的にみて第Ⅳ様式に該当する龍河洞式土器と第Ⅴ様式(新)に該当するヒビノキII式土器、そして中世の土師質土器(かわらけ)に3分することができる。量的には龍河洞式土器が最も多い。

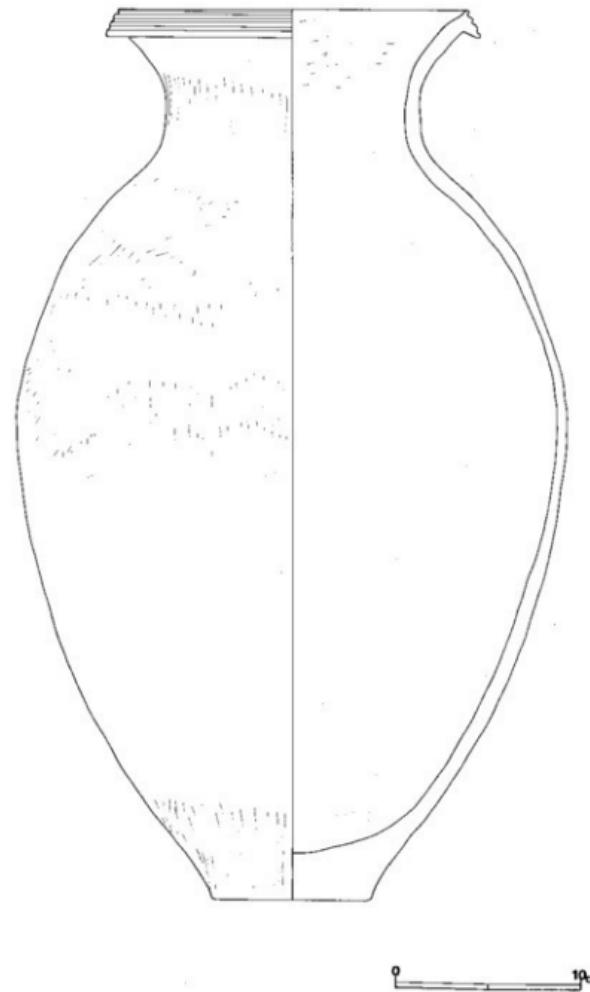
龍河洞式土器

壺形土器(第11図、第13図1・4・5、第14図1)

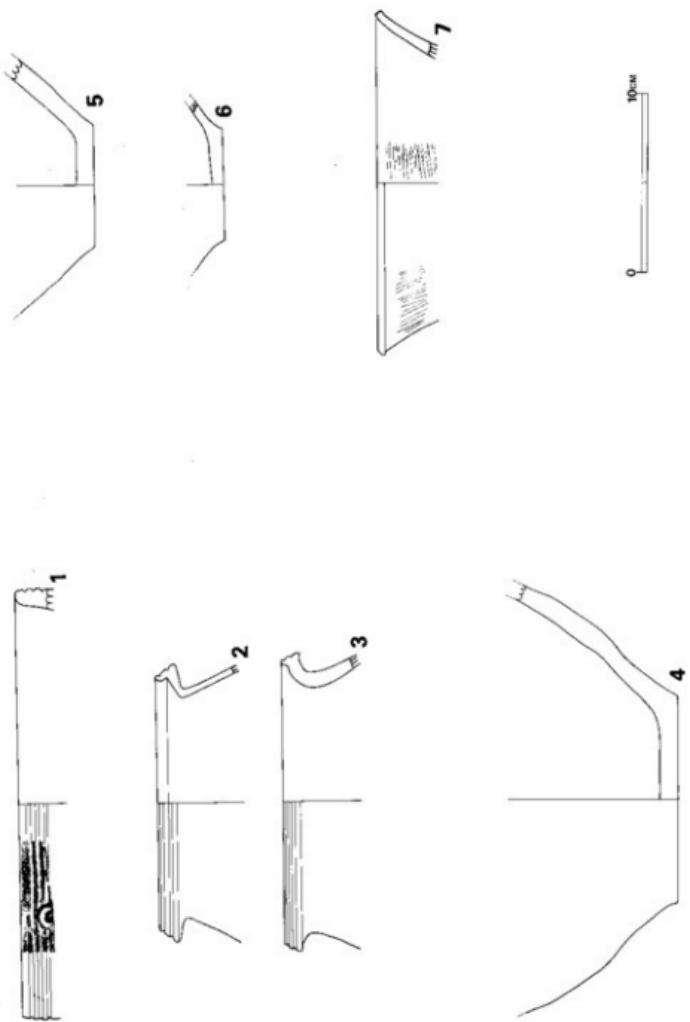
第11図は完形の壺形土器である。漏斗状に開いた口縁に三本の凹線文があり、頸上部に



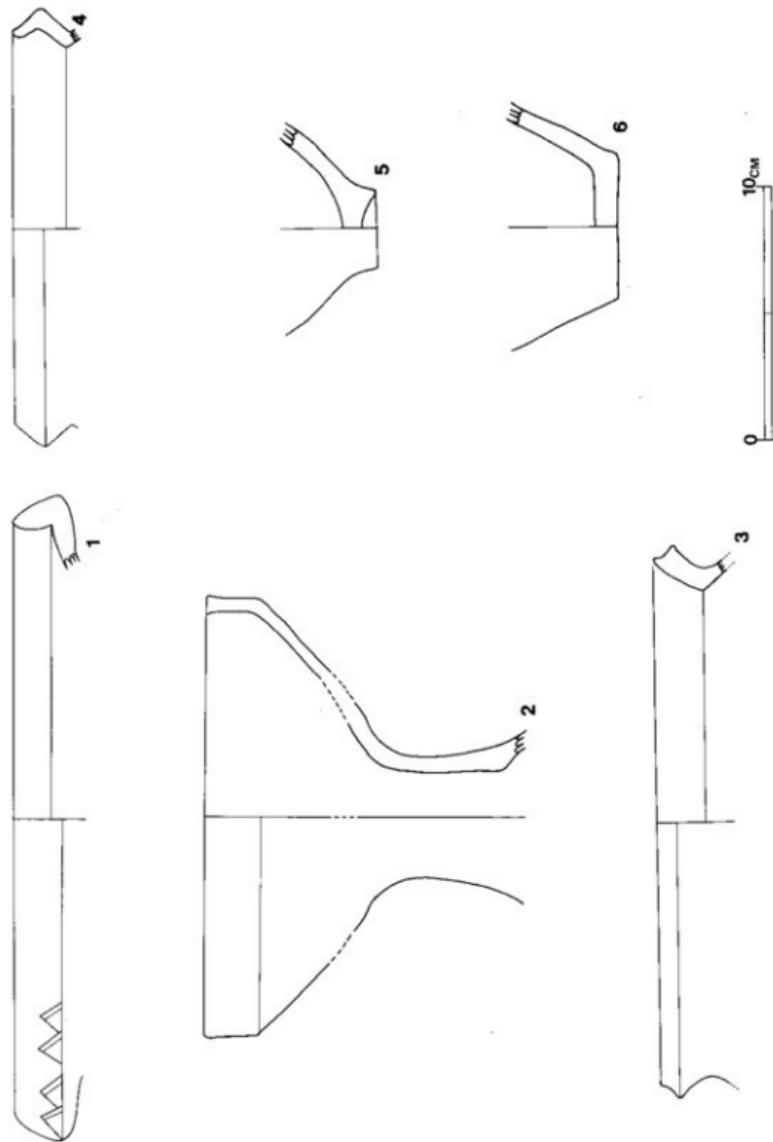
第12図 A地点出土の龍河洞式土器



第11図 A-5地点出土の龍河洞式土器



第13図 土壙墓4出土の土器群(1～5、龍河洞式土器。6、土師質土器。7、ヒビノキII式土器)
6は内外面朱塗



第14図 土壙墓周辺発見の土器(1~4、龍河洞式土器。5、6、ヒビノキ日式土器)

はヨコナデの手法の跡を残している（図版13）。頸部はやや立ち上がり、ゆるやかに上胴部に移るが縱走する刷毛目が描かれている。胴部の張りはすくなく龍河洞式土器の壺形にみられる特色を持っている。頸部より胴部最大幅を持つ胴部中央部までは、縱走・横走・斜走の刷毛目が密に描かれ、下胴部は箆で研磨した痕が残っている（図版13）。底部は大きく安定し、底部近くにも刷毛目が縱走するし、ヨコナデの手法もみられる。外面は黝褐色で内面は褐色である。外面には一部に黒斑がみられる。口縁部内面から頸上部内面までも刷毛目が横走し、頸部内面は指頭圧痕がみられ、内面上胴部から底部近くまで箆削りがみられる（図版14）。胎土中に砂粒を持つ。脚のない高环状部（第12図1）でもって蓋をし、壺棺として使用されたものである。A地点（第3図）出土の壺棺である。

第13図1の壺形口縁は（図版15）、土壤墓3から出土したものである。口縁が立ち上がり、それに三本の凹線文と重圓の貼布文のみられるものである。色調は黄褐色にして、胎土には砂粒を多く含まない。口縁内面には指頭圧痕がみられる。土壤墓3からは、この壺形口縁の他に第13図4・5に図示した壺形底部が出土している。ともに龍河洞式土器底部にして、胎土・色調がまったく同一である。よってこの二個の底部のうち、いずれかの底部が第13図1の壺形口縁と同一個体のものであろう。第13図4の底部は外面研磨され、黒斑が土器底部の大半にある。色調は黄褐色を呈し、内面底部近くに縱に箆けずりの手法が残っている（図版16）。第13図5の底部は内外面ともに研磨し、黄褐色をなす。底部近くに黒斑がある。4の底部に比較すると小形であるが、それでもこの底部を持つ壺形土器は、龍河洞式土器の壺形ではやや大形のものになる。

第14図1の壺形土器は、土壤墓群の近くで表面採集されたものである。これもあるいは壺棺として使用されたものかもしれない。この土器破片は口縁部だけしか残っていない。開いた口縁に立ち上り部を作った二重口縁の壺形土器で黄褐色を呈する。立ち上り部は鋸歯状文が入れられ、その三角形状の一つの鋸歯文の右側の斜線は二本でもって描いたものである。胎土には砂粒を持つ。

夔形土器（第13図2・3、第14図3・4）

第13図2・3の夔形土器口縁は先述した壺形土器を出土した土壤墓3から出土したものである。龍河洞式土器夔形であって、3の口縁は「く」字状に肩部が屈折し、口縁は内傾し二本の凹線を持っている。黒褐色にして研磨し、胎土には砂粒が多く跳上口縁を呈している。4の夔形口縁は小さな漏斗状の口縁に二条の凹線を持ち、器肉のやや厚いものである。胎土には砂粒を含み黄褐色の色調をなす。

第14図3の夔形は從来発見されている龍河洞式夔形には類例のすくないものである。頭部が「く」字状に屈折し、口縁端はヨコナデの手法がみられ凹んでいる。頸部にもヨコナデ手法がある。黝黄褐色をなす。次の第14図4と同様に土壙墓周辺から発見されているところから、夔棺として使われたものかもしれない。第14図5は二重口縁風の夔形土器であるが、普通みられる二重口縁の土器とは違って、一度外反し、その後内曲する口縁部の部分の短かいものである。香美郡土佐山田町龍河洞遺跡出土の夔形土器にも、このタイプの夔形土器がある。生地は黄褐色であるが、内外面に朱を塗っていて美しい土器である。夔形土器ではあるが朱塗りという点で夔棺としての使用も考えられる。胎土には砂粒を持ち、内曲する口縁部にはヨコナデの手法が残っている。

高坏形土器（第12図、第14図2）

土壙墓およびその周辺から出土した高坏形土器は、すべて龍河洞式土器である。

第12図1の高坏形土器の坏部は、第11図の壺形土器（壺棺）の蓋をした状況で発見されている。蓋をするには、高坏を逆に壺の口縁部の上に置いていた。この高坏の口縁部上端面は、やや中央が凹線文風になっているが、これはヨコナデによって生じたものであろう。坏部しか発見されず、脚部は失っている。外面褐色、内面は黄褐色にして、口縁に向って立ち上った部分は、三本の凹線が入れられている。砂粒を多く含んでいる。外面の器面は箇でもって研磨している。口径は21.6cmである（図版17）。

第12図2の高坏形土器の坏部片は、土壙墓1から出土したものである（図版4）。外面の色調は淡黄褐色であり、器面は研磨されている。器内には砂粒を多く含有している。内面のカーブの部分は指頭によるヨコナデ手法がみられる。口縁上端面には凹線一条があり、内面には三条の凹線がある。坏部の立上り部から傾斜した坏部に移る部分は、小さな突起部がみられる。色調・胎土などからみて、第12図の3の脚部と同一であるし、出土地点も近いので（図版3）この3の高坏脚部がこの高坏坏部につくものと考えてもおかしくない。

第12図3・図版18の高坏形土器脚台部は、いま述べたように土壙墓1に接して土壙墓外から出土している。脚台下端面がやや上方に拡張されぎみのものである。そしてこの端面に凹線文を一条持つものである。脚台部下端にはヨコナデがみられる。また脚台部内面には箇削りしていない。すくなくとも清近丘遺跡出土の高坏形土器脚台部は、その内面に箇削りしていないのが特色である。また脚台部の上部内面には絞り目があり、その下部には指頭にて調整した痕がある。絞り目の上には粘土をまたうすく塗布している。なお絞り目

と関連する脚台部の上部にあって坏部を形成するための粘土の円板がこの脚台部には残っていた。この粘土の円板は径7.6cmで、その形態は凸レンズ状をなす。このレンズ状の円板を用いて脚部上部を閉ざして坏部の底面とすることは論を待たない。この高坏形土器脚台は、同じ龍河洞式土器のなかでも、第III様式の伝統の強いものと言つてよかろう。

第12図4・図版19の高坏形土器脚台部は、土壤墓3よりの出土である。脚台下端面が上方に拡張されたもので、その端面にはヨコナデの痕がみられる。器表は赤褐色をなし、胎土には砂粒を多く包藏する。先述した3の高坏形土器と違つて、この高坏形土器は脚台部と坏部とを組み合わせて作る組み合わせ式成形手法とみられる。この脚台部は從来の龍河洞式土器の高坏式土器のものよりは、その径が大きい。高さは從来のものと比較しても、余り高くない。

第14図2の高坏形土器は、先述したA地区5地点の壺棺の周辺から出土したものであり、供獻の土器とみられる。色調は内外とも赤褐色であるが、外面は器表がはげて黒褐色の部分が多い。内面は研磨され赤褐色である。口縁上面は平坦であり、口縁近くは立ち上っている。坏部から脚台部へ屈折する内面は、粘土の円板をのせた痕跡が残っている。脚台部上面の内部には絞り目がみられる。このような絞り目と高坏部の底部の無いところから、この高坏形土器は脚台部と坏部とを連続して成形する連続成形手法で作ったものであることがわかる。一部に黒斑があり、窓削りの痕は見あたらない。文様としての凹線文はまったくない。脚台部の裾部を欠いている。この高坏形土器は土壤墓への供獻の土器と考えてよくはないだろうか。

ヒビノキII式土器

壺形土器（第14図5・6）

土壤墓周辺から発見された土器片で二個とも壺形底部である。ともに土壤墓そのものとは関係なく、土壤墓周辺への混入とみられる。次項で述べる夔形土器も、土壤墓4の上部から出土しているが、これとて後の混入とみてよかろう。5の底部は内外面黒褐色にして、砂粒多く窓で研磨する。小形の壺形土器の底部にして、小さな上げ底である。6の底部は赤褐色で砂粒多く、一部に黒斑のあるもの、そして内面は黄褐色である。

夔形土器（第13図7）

土壤墓4の上部より出土したので、直接土壤墓とは関係のある土器片ではない。ヒビノキII式土器の夔形口縁部で、一部に内外面に刷毛目がある。黒斑を持ち、黒褐色をなす。

土師質土器（第13図6）

土壙墓4をすこし削ったところで第13図6に図示した土師質土器（かわらけ）の底部が出土した。糸切底にしてロクロ目がすこし残っている。环形の土器で室町時代のものとみられる。なお土壙墓3からも、土壙墓をすこし掘り下げたところで土師質土器の底部の小破片が出土している。これは復元不可能で図示しなかったが、器形は环である。室町時代のものであり、この方は内外面に朱を塗った痕跡があった。土壙墓3・4はやや方形を呈し、すこし削ったところでこのような土師質土器が出土したので、この両土壙墓は掘り初めの段階は中世の木棺墓埋葬場と考えたくらいである。

II. B-1区出土の遺物

B-1区出土の遺物類は、表面採集の弥生土器、第一層（表土層）出土の土器群、第2層黒色土層（竪穴状遺構上部）出土の土器群、そして第3層黒褐色土層（竪穴状遺構床面上部）の土器群、さらに竪穴状遺構床面上の遺物群と5項に分けて記述したい。

このB-1区の表面採集の土器は不思議に弥生土器に限定されていた。

1. 表面採集の弥生土器

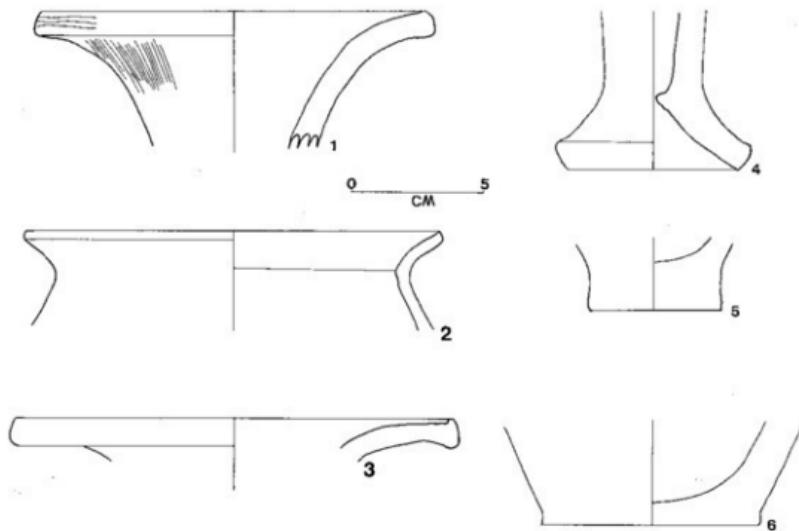
表面採集の弥生土器は、型式的に分けると弥生第V様式に該当するヒビノキI式土器とヒビノキII式土器となる。各型式ごとに表採の土器について記述しよう。

ヒビノキI式土器

表面採集のヒビノキI式土器は、壺形・甕形・高坏形の器形が発見されているが、発見量はヒビノキII式土器に比較するとすくない。

壺形土器（第15図1）

口縁は広く外反し、器内は厚い。表面赤褐色で黒斑がある。口縁端の一部に三条の櫛描文があり、頸部上部には刷毛目がある。砂粒多し。



第15図 B-1区表面採集の弥生土器 I

壺形土器（第15図2）

内外面赤褐色にして、ややゆるやかに頸部は「く」字状に屈折する。砂粒多く卯目ないところはヒビノキI式土器の壺形の特色を持つ。

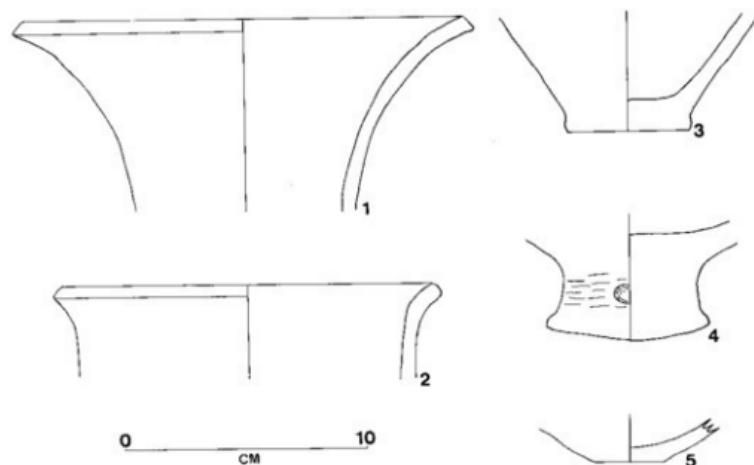
高壺形土器（第15図4）（図版20）

ヒビノキI式土器高壺の表採品は、高壺の脚部である。内外面の器面はよく研磨され、器内には砂粒を混入する。高壺脚台部内面には絞り目が残っている。脚の裾は余り拡がらず高壺としては珍らしい。脚の筒部から裾部へ移る個所の内面には突起部があり、これが小さな穿孔部を作っている。

ヒビノキII式土器には、壺形・壺形・壺形の器形がみられた。

壺形土器（第15図3・4・5、第16図1・3）

第15図3の壺形土器は典型的なものである。口縁部が広く外反し、口縁端は上下に拡張する。無文である。頸部以下は欠いでいるが、頸部は立ち上がり胴部は卵形をした壺形である。赤褐色で外反した上坦面には刷毛目がみられる。砂粒多く含む。第15図5・6は3の如き壺形の底部とみられる。底部の大小は器体の大小による。5は外面黒褐色、内面黒色で底部側面には指頭圧痕がみられる。6は外面赤褐色、内面黒色で胎土に砂粒が多い。



第16図 B-1区表面採集の弥生土器2

第16図1もヒビノキII式壺形土器の典型的なものである。内外面赤褐色にして、砂粒を多く含み器肉は薄い。口縁はやや外反する。この種の壺形の底部は第16図の3の如きものと考えられる。底部は小さい。外面赤褐色で内面黒色、砂粒を多く含む。

壺形土器（第16図2・4）

第16図2は壺形土器口縁部で、無文、頸部より口縁にかけてかすかにゆるやかに外反する。赤褐色にして砂粒を含み、内面は黄褐色である。高知県西部にのみ分布する同時期の土器である芳奈II式土器の壺形土器と共通するものである。第16図4の底部は、台付壺形土器の底部といってよからう。底部は丸味を持ってやや安定を欠くが、それでも座りはよい。ところどころに指頭圧痕の跡がみられ、それに叩目痕がついている。赤褐色にして砂粒を多く含む。ヒビノキII式の壺形土器としては珍らしいタイプである。

壺形土器（第16図の5）

壺形土器の底部で、丸底風の平底に特色がある。砂粒を多く含み、内外面赤褐色である。一部に黒斑が残っている。

2. 第1層（表土層）出土の土器群

B-1区の表土層出土の土器群は、型式的にみて第IV様式土器に該当するバーガ森北式土器および龍河洞式土器、第V様式土器（古）に該当する寺門式土器、第V様式（中）に該当するヒビノキI式土器、そして第V様式土器（新）に該当するヒビノキII式土器、さらに中世の羽釜・土師質土器などが出土している。

バーガ森北式土器（第17図1）

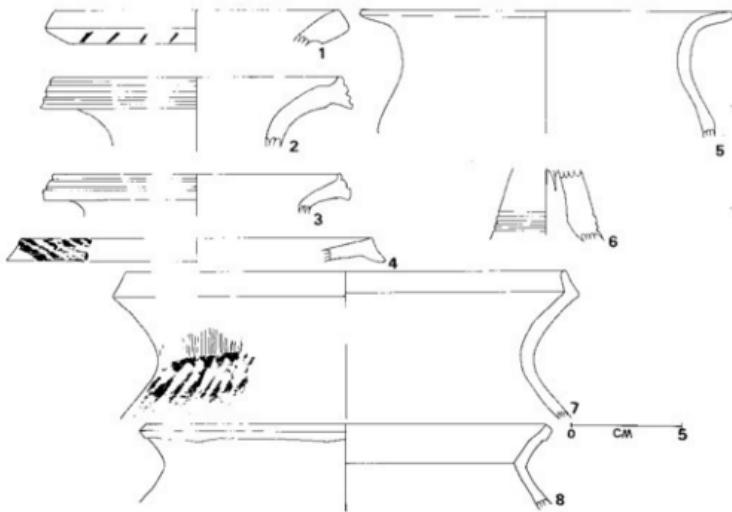
複合口縁をなし、その下端に押圧列点文を一点間隔につけているところにバーガ森北式土器の特色がある。龍河洞式土器に伴うものであるが、この型式土器は高知県中央部から西部にかけて分布するところから、西からの持ち込みの土器とみてよからう。赤褐色を呈す。壺形土器とみられる。

龍河洞式土器

第IV様式土器に該当する、そして高知県の中央部から東部にかけて分布する土器型式である。

壺形土器（第17図2～4）

漏斗状に開いた口縁部に2条ないし3条の凹線を持つものがある。第17図2・3の土器とも黄褐色にして、砂粒が多い。第17図4の土器も壺形口縁で外面は黄褐色、内面は黝褐



第17図 B-I 第1層出土土器

色である。外反した口縁が下部に開いて、それに範描短斜線文を入れたものである。

夔形土器（第17図5）

赤褐色で外面を研磨する。砂粒多く含み、口縁大きく外反する。上胴部の張る薄手の夔形で頸部のカーブは緩かである。

高环形土器（第17図6）

黄褐色にして内面は黒褐色、内面に絞りの痕がある。外面に三本の範描沈線文がある。

寺門式土器

高知県吾川郡伊野町寺門を標準遺跡とする畿内第V様式(古)に併行する型式である。龍河洞式土器の凹線文がすくなくなり、土器の無文化へ一步近づいていく。この寺門式土器に併行し、主として高知県の西部に分布する土器型式は神西式土器である。

壺形土器（第17図7）

赤褐色をなし、口縁部は二重口縁をなす。口縁部の内傾した部分が短かい。内面は黒褐色である。

夔形土器（第17図8）

内外面とも赤褐色にして研磨している。内面には擦痕がみられる。頸部は「く」の字状

に屈折し、脣部は張る。口縁のごく一部が複合状をなす。

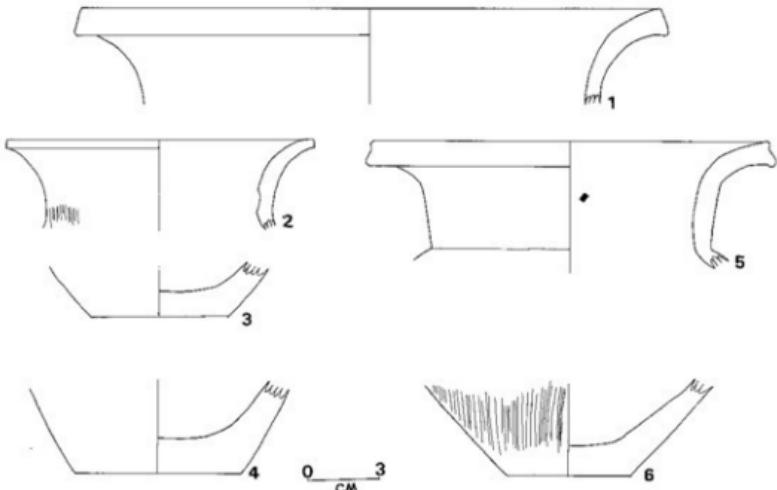
ヒビノキ I 式土器

壺形土器（第18図）

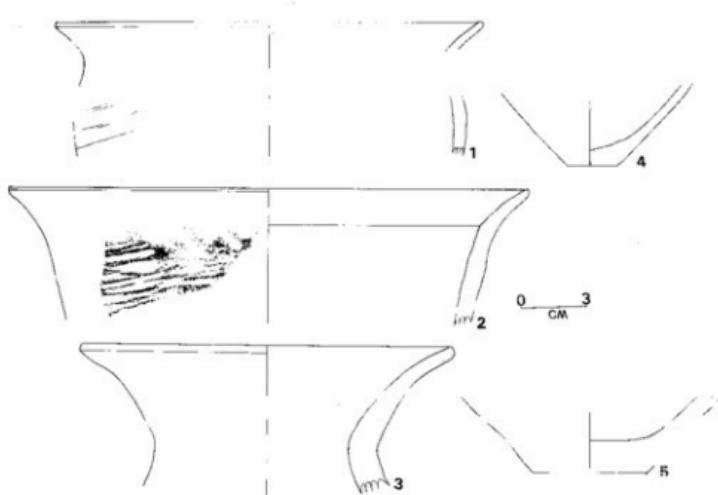
口縁の外反し、頸部の立っている、そして上脣部から急に丸味を持つところに本型式壺形土器の特色がある。第18図1は赤褐色で大形の壺形土器である。2の壺形口縁と3の底部は胎土・色調・出土状況から同一個体のものとみられる。黄褐色にして砂粒が多く口縁はやや外反する。頸部はゆるやかなカーブを持つ。刷毛目が一部につけられる。脣部は欠いているが円形に張るものとみられる。頸部内面には指頭を横にすいた痕が明瞭に残っているし、底部は安定して大きい。底部内面にも指頭圧痕が多くみられる。4の底部も壺形底部にして内外面黄褐色、底径大である。5の壺形口縁は口縁端に凹線文風の名残りがあり、口唇が下部にたれている。頸部は立ち、頸部から上脣部への移行は明確である。赤褐色にして胎土に砂粒が多い。6の底部は壺形底部で内外面赤褐色にして胎土に砂粒多し。一部に黒斑があり、縦に刷毛目が走る。底部近くに指頭圧痕がある。

壺形土器（第19図1・2）

第19図1・2にヒビノキ I 式土器の裏形である。1の裏形土器は赤褐色にして胎土に砂



第18図 B-1 第1層出土のヒビノキ I 式土器



第19図 B-1 第1層出土ヒビノキI式・II式土器

粒多く薄手である。頸部の「く」字状屈折部以下には叩目痕があるが、口縁部より頸部屈折部までは叩目がない。叩目は太目のものである。2の變形土器は口縁部径が最大で、頸部以下ですばまる深鉢形といってよいものである。外面は黒く煤け黝褐色をなす。内面は赤褐色である。頸部以下に横走する叩目がある。

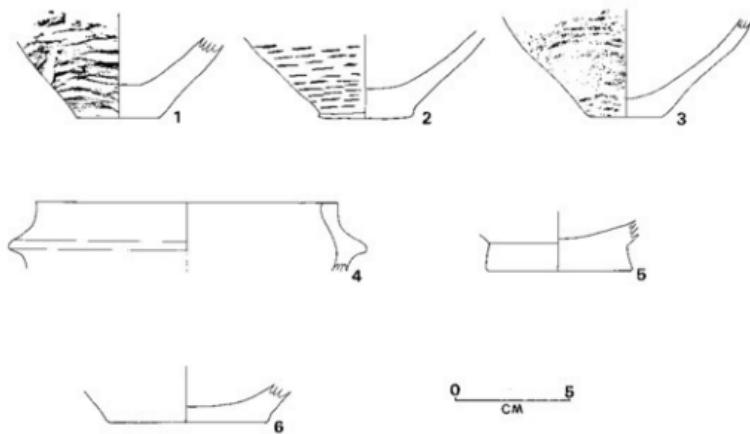
ヒビノキII式土器

壺形土器（第19図3～5）

第19図3の壺形土器はヒビノキII式で、口縁部が外反し、頸部はゆるやかな「く」字形をなす。頸部は欠いでいるが張るものとみられる。頸部の器肉は厚く作っている。胎土に砂粒を多く含み、赤褐色をなす。無文である。4・5は壺形底部で、4は内外面赤褐色にして研磨し、ヒビノキII式土器特有の小さな底部をなす。胎土に砂粒多し。5の底部は内外とも赤褐色にして一部に黒斑がある。砂粒を多く含む。器体の割りに小さな底部であるところにヒビノキII式土器の特色がある。

變形土器（第20図1～3）

A-1区第1層出土のヒビノキII式變形土器は、すべてが底部である。1～3とも底径小さく、器面に叩目が横走する。1は褐色にして一部に黒斑があり、砂粒多く含み、底部



第20図 B-1 第1層出土のヒビノキII式土器・中世土器

に指頭圧痕がある。2は赤褐色で砂粒を含む。貼布底である。3は灰褐色で黒斑が一部にある。

中世土器

B-1区第1層出土の中世土器として、土製羽釜と土師質土器（通称かわらけ）がある。

土製羽釜（第20図4）

胎土は良好にして砂粒はごくすくない。鋸から下は黒く焼けている。型態と出土状況から次に述べる土師質土器と同時期のものである。小型の土製羽釜である。

土師質土器（第20図5・6）

5は壺の底部であるが、底部が厚味を持つ。黄褐色で糸切底である。砂粒の含有すくなし。6の壺も5の壺と同時期のもので室町時代後半のものとみられる。ロクロ痕も残り、赤褐色をなす。糸切底である。

3. 第2層黒色土層（竪穴状遺構上部）出土の土器群

竪穴状遺構上部の黒色土層からは龍河洞式土器とヒビノキII式土器が混在してみられた。また須恵器の破片1個も出土している。

龍河洞式土器

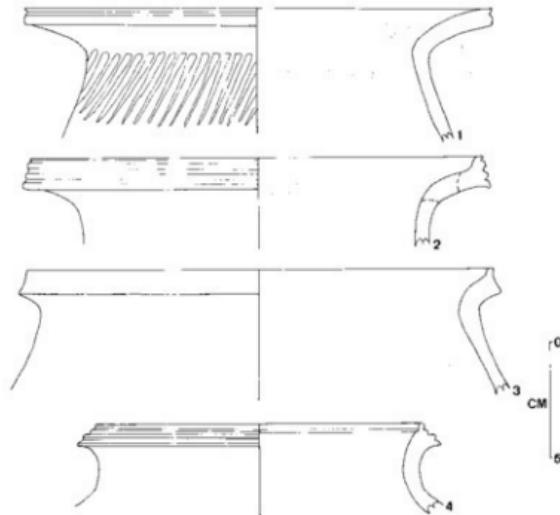
第2層の黒色土層出土の龍河洞式土器は夔形土器と壺形土器である。

夔形土器（第21図1・3）

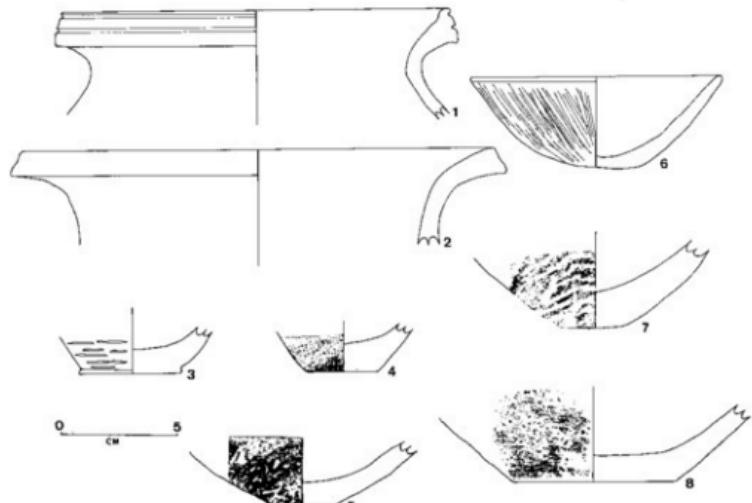
ヒビノキII式土器の夔形土器に比較すると、非常に堅緻である。1の夔形土器は砂粒の混入多く、外面赤褐色、内面黝灰色を呈す。口縁は外反し、口縁端に凹線状の沈線1本がある。胴部は口縁よりも張らず、やや細長いものと思われる。頭部には寛圧痕文が美しくつけられている。この夔形土器は從来通り見かけることのなかったタイプである。3の夔形土器はヨコナデが口縁下にみられ、淡褐色で砂粒が多い。器内外面はよく研磨している。頭部以下は煤けている。口縁はヨコナデで中央が凹んでいる。口縁端は内傾し跳上り口縁風に作っている。口径は割りには器高の余り高くない夔形とみられる。この夔形も從来の龍河洞式土器のものには、余り見られないものである。

壺形土器（第21図の2・4、第22図の1）

壺形土器の口縁部端面に2条ないし3条の凹線文を施したものである。2の壺形土器は内外面黄褐色で、口縁内面にはヨコナデがみられる。口縁近くに1個所の穿孔を持つ。この穿孔は内面より穿っている。頭部の立った壺形土器とみられる。第21図4と第22図1の



第21図 第2層出土の龍河洞式土器



第22図 B-I 第2層出土土器群

壺形土器は、頸部の立ち上りの部分の小さい壺形土器である。ともに口縁部端面に凹線文があり、口縁は漏斗状に上下に開いている。口縁端は跳上り口縁風に作り、第21図4の壺形土器は口縁下内面に一本の凹線を持っている。4の土器は内外面黒灰色、1の土器は黒褐色である。ともに砂粒を多く含有する。

ヒビノキII式土器

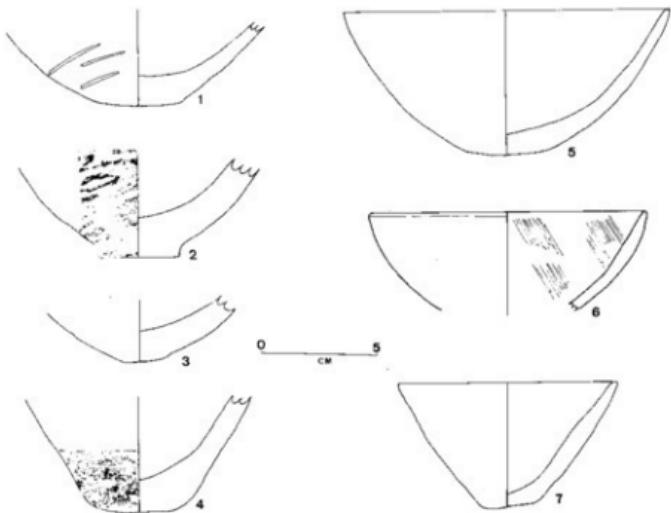
第2層の黒色土層出土のヒビノキII式土器は、壺形・甕形・塊形・小形粗形土器・高环形などの器形がある。

壺形土器（第22図2・4・8）

2の土器は壺形口縁で、口縁外反し、口縁端は厚味を持つ。外面赤褐色にして内面褐色、内外面研磨す。砂粒を多く含む。4・8は壺形底部で、4は灰褐色、外面底部近くに刷毛目痕あり、しかも底部にも刷毛目を持つ。8は大形壺の底部で外面黒褐色、内面淡褐色、底部は黒色で砂粒多し。底部近く一部に叩目痕があるが、拓本には余りよくでてない。

甕形土器（第22図3・5・7、第23図1～4）

第22図3の甕形土器底部は内外面とも赤褐色にして、小さな平底である。叩目痕が横走し、砂粒が多い。5も同様にヒビノキII式甕形土器の底部であるが、これも叩目が一面に



第23図 B-1 第2層出土ヒビノキII式土器

横走し、砂粒を多く含有している。内外面黄褐色で小さな底部にその特色がある。第22図7の底部は小さな丸味のある平底で、器面一面に叩目痕を持つ。さらに底部にも叩目を持つ。同様の底部は第23図1・4にもみられる。第22図7は黄褐色、第23図1は赤褐色、4は黄褐色である。第23図2の夔形底部は、小形の平底で、外面には先に述べたものと同様に叩目痕のみられるもの、黄褐色にして内面には指頭圧痕がみられる。3の夔形底部は小さな底部で尖底に近いものである。表面に叩目があり、淡赤褐色であり、内面は黒色である。砂粒を多く含有している。

塊形土器（第22図6・第23図5～7）

6の塊形土器は丸底風の平底に特色がある。外面には一面に刷毛目があり、胎土には砂粒を多く含む。内外面ともに黄褐色である。塊形土器というより壺形土器と言った方がより正確な表現でなかろうか。5の塊形土器は内外面黄褐色で、胎土に砂粒を混入し、底部は丸味を持った平底風のものである。典型的なヒビノキII式の塊形土器である。6の塊形は外面に叩面痕をもつもので、内面には刷毛目がある。黄褐色を呈し、砂粒多く含んでいる。7の塊形土器は変った形をしたものである。これに近い形をしたものは、高知県西部の芳奈II式土器（ヒビノキII式に時期的に併行）の塊形にこれに近いものがある。赤褐色

をなし、砂粒を多く胎土に含み、小さな平底を持つものである。

高环形土器（第24図1～3）

1は高环形土器の坏部である。小形の高坏で色調は赤褐色で、内外面は美しく研磨する。砂粒の含有量は多くない。坏部は立ち上がり、稜を持つ。2・3は高坏の脚部、それも基部である。2の脚部基部の破片は、赤褐色にして砂粒を多く含有する。また脚部基部の先端部は指頭をつっこんで作ったものとみられる。3の脚部基部は内外面淡褐色にして、とくに内面に刷毛目痕が小刻みに入れられているのは注意すべきであろう。

須恵器（図版21）

外面叩目痕があり、内面青海波文のある夔形破片が一片出土している。

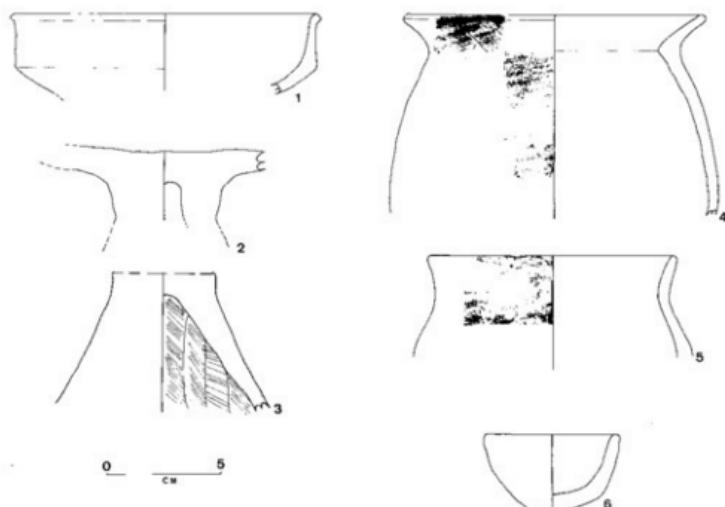
4. 第3層竪穴状造構内の黒褐色土層出土土器群

この層からは次の如き土器群が出土している。

ヒビノキII式土器

夔形土器（第24図4・5）

1・2の夔形土器は典型的なヒビノキII式の夔形土器である。4は外反する口縁に、「く」



第24図 B-1 第3層出土のヒビノキII式土器

の字状に屈折する頸部を持ち、口径よりも大きく胴部の張るものである。黄褐色をなし、砂粒含有多く、器面には叩目痕が口縁から底部まで横走するものである。5の壺形土器は口縁から頸部までが立ち上ったもので、胴部のやや張ったものである。黄褐色で口縁から底部まで一面に叩目が横走したものである。

小型粗形土器（第24図6・図版22）

器の内外面に指頭圧痕が一面にあるところから手捏土器とみてよかろう。色調は黄褐色にして、一部に黒斑がある。砂粒を胎土に含む。祭祀用の土器とみてよかろう。

なお第3層黒褐色土層からは、以上の三点のヒビノキII式土器の他に、室町時代の土師質土器の底部が二片出土している。

5. 壇穴状造構床面出土の遺物

壇穴状造構床面というのは、層位的には第3層黒褐色土層ではあるが、第4層茶褐色土層に接する部分をいう。床面出土の遺物は、弥生土器とそれに伴なう石器群に分けることができる。弥生土器は少數の龍河洞式土器と大半を占めるヒビノキII式土器である。

床面出土の石器群は、その出土状況や石器の形質からみて、ヒビノキII式土器に伴なうものである。

土器

床面出土の弥生土器は、先述したように型式的に龍河洞式土器とヒビノキII式土器に二分することができる。

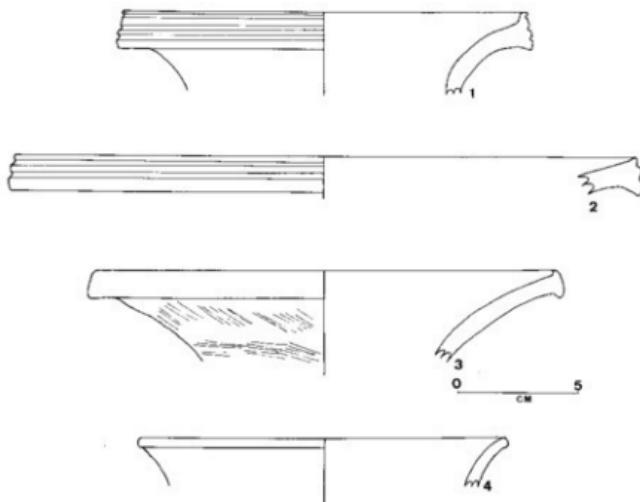
龍河洞式土器（第25図1・2）

この二片の龍河洞式土器は、ヒビノキII式土器片と混在して出土している。二片の龍河洞式土器は図示したように、ともに壺形土器口縁である。第25図1の壺形口縁は口径小さく、黄褐色にして砂粒を多く含む。漏斗状に開いた口縁に三本の凹線を持つものである。小形の壺形土器である。2の壺形口縁は口径が大きく25.8cmである。褐色にして漏斗状に開いた口縁に凹線文が二本入る。胎土に砂粒を持つも、ヒビノキII式土器程ではない。口径の大きさから相当大きな壺形土器が考えられる。

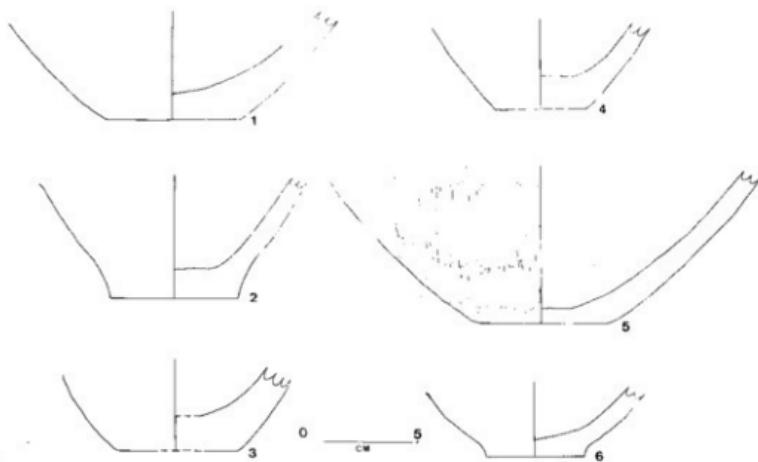
ヒビノキII式土器

床面出土のヒビノキII式土器は、これを器形に分つと壺形・甕形・壺形の三種に分けることができる。

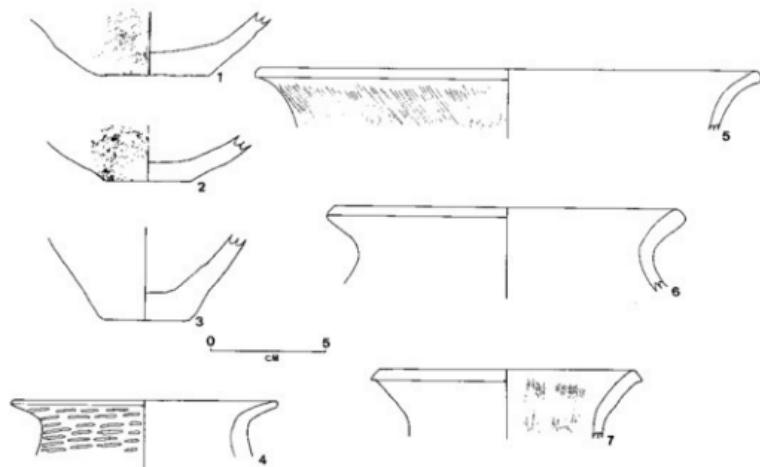
壺形土器（第25図3・4、第26図、第27図1～3）



第25図 穂穴状遺構床面出土の弥生土器その1



第26図 穂穴状遺構床面出土の弥生土器その2



第27図 積穴状竪構床面出土の弥生土器その3

壺形の口縁をみると二形式があることがわかる。一つは第25図3にみる如く、口縁が広く外反するもので、口縁端は上下にすこし括がったものである。(この壺形は内外面赤褐色で、胎土に砂粒を含み、器面には刷毛目が走っている。)これに対しいま一つの壺形は、第25図4の土器の如く口縁がやや外反し、口頸以下が直立する壺形である。(この壺形は薄手で研磨され、内外面赤褐色である。)

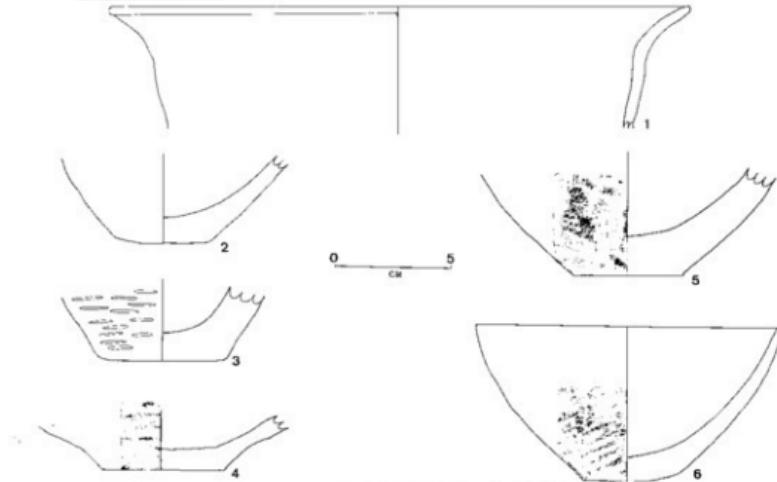
これらの口縁に伴なう壺形の底部は、第89図と第27図1~3に図示してある。

図	番号	色調	砂粒	特記すべきこと
第26図	1	外面 黄褐色 内面 灰黒色		底部が器肉にくらべて小さい。
"	2	黄褐褐色	多し	底部に黒斑あり。
"	3	淡褐色	多し	
"	4	外面 棕褐色 内面 鷗灰色	多し	
"	5	外面 赤褐色 内面 灰褐色	多し	底部は小さく薄い。刷毛目擬走。
"	6	黒褐色	多し	小形
第27図	1	淡褐色		底部に近い部分に叩目痕あり。
"	2	黄褐色	小さな砂粒	底部近くに叩目痕あり。
"	3	黄褐色	多し	

夔形土器（第27図4～7、第28図1～5）

第28図4の夔形土器は、龍河洞式土器片と同一の地点から出土したものである。小形の夔形で内外面ともに黄褐色をなす。軟質の胎土で胎土中の砂粒は少ない。口縁から底部にかけて一面に叩面痕が横走する。第27図5の夔形土器は、口径の大きいものである。刷毛目が一面にあるが、これは頸部まで上胴部以下は叩目が一面にあるものと思われる。内外面とも赤褐色をなし、胎土に砂粒を多く含む。第27図6は器面の研磨された夔形土器で頸部が「く」字状に屈折し、胴部最大径が口縁径よりも大きくなるものであることを示すものである。砂粒を多く含み、赤褐色である。第27図7は頸部の屈折の余り強くない夔形で、内面黄褐色である。胎土には砂粒を多く含み、土器内面に刷毛目が縱走する。口縁端がごくすこし下部にたれている。第28図1の夔形は薄手であるが、口径の大きいそして胴部の張らない、いわば深鉢形というべきものであろう。砂粒の混入が特に多い。第28図に図示した底部について表で示めそう。

番号	色 調	砂粒	叩 目 痕	特 記 す べ き こ と
2	赤 褐 色	多し	水洗で消える	丸味をもった小さな底部
3	赤 褐 色	あり	あり	厚手
4	外画 淡褐 黒 色 内面 淡褐 色	あり	一面にあり	胴部が張ると思われる
5	黄 褐 色	多し	刷毛目に横走する叩目あり	



第28図 竪穴状造構床面出土の弥生土器その4

塊形土器（第28図6）

内外面赤褐色にして、黒斑が一部にある。胎土中に砂粒の混入多く、叩目痕が一面にある。塊は左右均正でなく、底部は丸味のある平底である。底部は凹凸がみられる。典型的なヒビノキII式の塊形土器である。

石器

床面出土の石器として、砥石・叩石・台石と三点出土している。

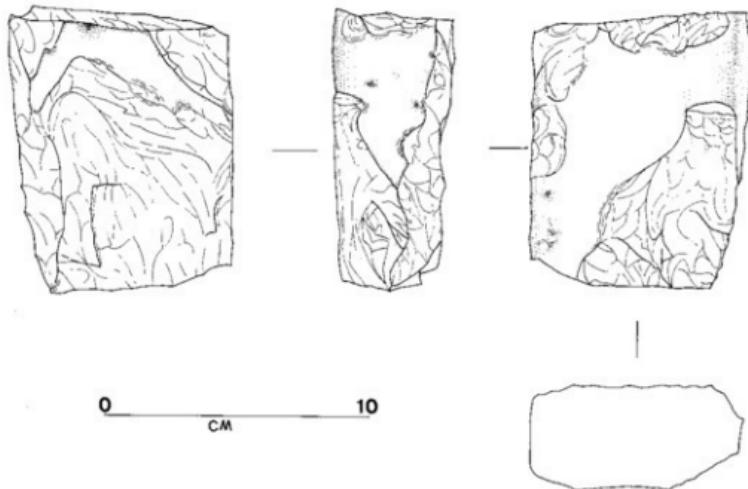
砥石（第29図・図版23）

硬質砂岩製の砥石であり、研いだ面は平坦面の一方と側面一方との二面である。とくに平坦面の研いた個所は、中央部がゆるやかに凹んでいる。砥石として利用していたものとみられるが、打削面が残っている。 $11.4 \times 8.4\text{cm}$ で厚さは4cmである。

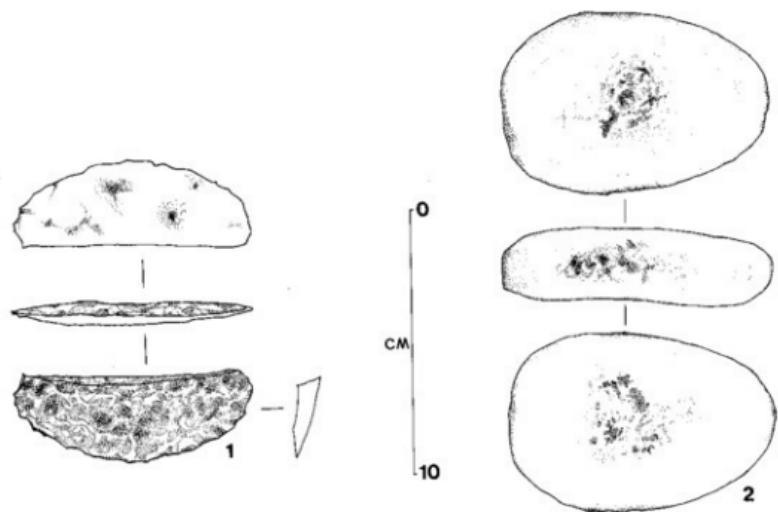
叩石（第30図の2・図版23）

砂岩製の円礫を使用した叩石である。 $10.1 \times 6.8\text{cm}$ 、それに厚さ2.7cmの楕円形の円礫の長軸の両端と短軸の両端に敲打痕が残り、また坦面の中央部に敲打痕が残っている。坦面中央部の敲打痕は両面にあり、すこし凹んでいる。

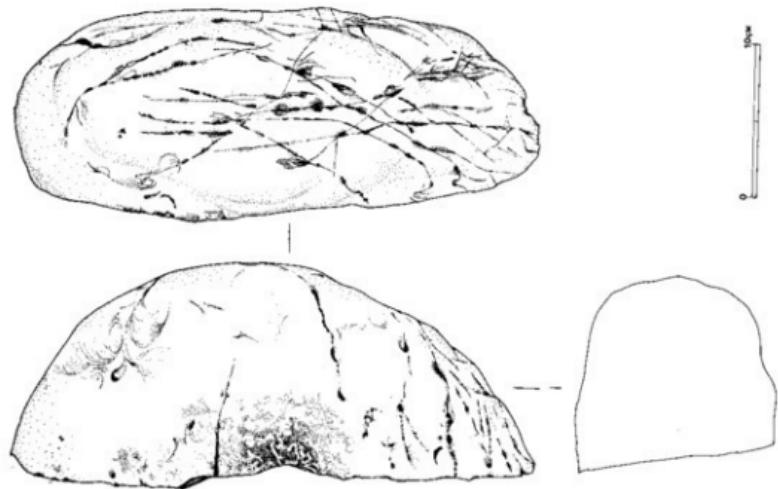
台石（第31図・図版24）



第29図 壇穴状造構床面出土の砥石



第30図 穴状遺構床面出土の打割石庖丁と叩石



第31図 穴状遺構床面出土の石器工作台(台石)

砂岩製の大きな円礫であって、片面の中央に径10cm大の叩打面がある。この叩打面はその中央部で1.2cm程凹んでいる。他の部分にはまったく叩打面を持たない。叩石の台石として使われたものであろう。円礫は大きく二分し、その一部しか出土しなかった。

なお床面出土でなく、A-2地区上層出土の打割石庖丁がある。これについては、ここで石器として一括説明しておきたい。

打割石庖丁（第30図1・図版25）

A-2地区の上層から出土したもので、ヒビノキI式土器に混在して発見されているもので、それに伴なう石庖丁であろう。石庖丁は珪質砂岩を素材とし、赤色を呈す。大形の岩礫の第一次剥片をそのまま素材とし、刃部の一部に片面だけ二次調整を施した粗製品である。表面は、自然礫の際の礫皮をそのまま残し、背面には打割した際の面をそのままにしているが、この面の刃部には二次調整を施している。

紐かけの抉入などはまったくみられないもので、刃部は外弯する。長さ9cm、最大幅3.3cm、厚さ1cm、重量32gである。最近南四国の弥生後期中葉の石庖丁には、このような型態のものが、宿毛市山奈町芳奈向山および芳奈遺跡から出土し、また香美郡土佐山田町ヒビノキ遺跡から出土している。ただ前者の芳奈両遺跡出土の打割石庖丁は、南四国（高知県）西部にのみ分布する芳奈I式土器に伴うもので、両端に紐かけの抉入を持つ石庖丁である。これに対し後者のヒビノキ遺跡および本遺跡出土のものは、南四国（高知県）中央部および東部に分布するヒビノキI式土器に伴うものであるので、両端に紐かけの抉入を持たない外弯刃の石庖丁である。この種の粗雑な石庖丁をとくに打割石庖丁と呼びたい。

III. B-2区上層（黒色土層）出土の土器群

B-2区上層部から数多くの土器群が出土した。これについては遺構の部で中世に掘られた土器溜があるためであることを述べた。

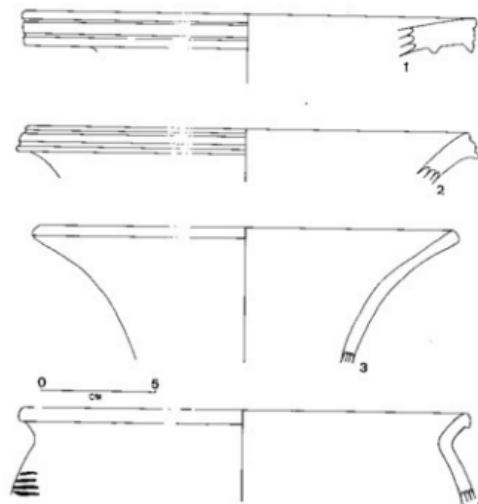
この項では主として土器溜出土の土器群を型式的に分類して紹介する。ただこの土器溜のなかから打削石庖丁が一個出土しているが、これについてはすでに石器の項で詳述した。

北カリヤ式土器（第32図1）

口縁が思いきり拡がって、結果的には口縁上面が平坦になる。このような口縁部の在り方は弥生中期中葉の壺形土器の特色である。口縁端は漏斗状に上下に広がらずに、下端にたれるだけである。また口縁端よりすこし下がったところに断面三角形状の突帯を持つ。口縁には二本の凹線が入れられている。口縁の下垂部より突帯までのせまい間には美しい刷毛目が入っている。色調は黄褐色である。

龍河洞式土器（第32図2）

内外面赤褐色で、口縁部に二本の凹線文がある。口縁下端がたれた壺形で研磨されている。



第32図 B-2区上層出土土器その1

ヒビノキ I 式土器（第32図 3・4、第33図 1・2）

第32図の3はヒビノキ I 式の壺形土器である。薄手で内外面赤褐色、砂粒を含有したものである。4はそれに伴なう甕形土器で外面黒褐色、内面黄褐色、頸部以下の部分には煤が残っている。また叩目が「く」字状に屈折した頸部以下にあったのであるが、消滅してしまって一部に残っているにすぎない。口縁部は折りまげてやや厚くしている。

第33図 1・2はヒビノキ I 式の壺形土器の底部である。

番号	色 調	砂粒	特 記 す べ き 事 項
1	淡 黄 褐 色	多し	底部に近くごく一部に叩目痕あり。安定した平底
2	外 面 黑 褐 色 内 面 黑 褐 色	あり	刷毛目あり。指頭調整痕あり。大きな平底

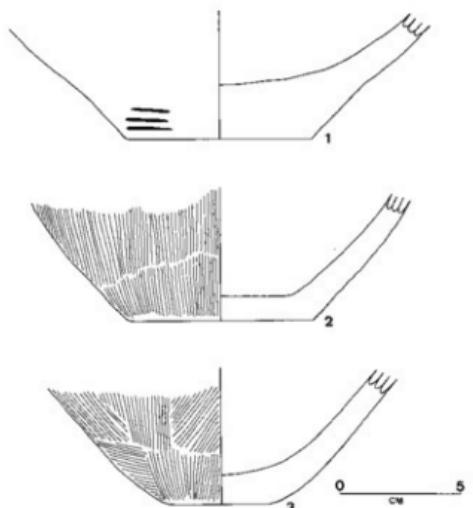
ヒビノキ II 式土器（第33図 3、第34図、第35図、第36図、第37図 1～3）

ヒビノキ II 式土器の底部については次表をもって説明しよう。

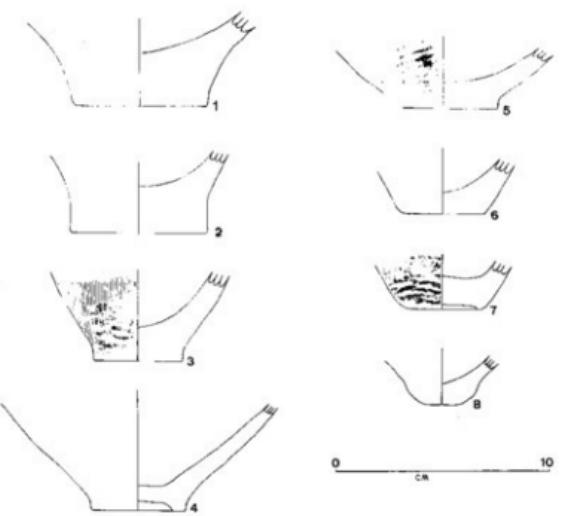
図	番号	器形	色 調	砂粒	特 記 す べ き 事 項
33	3	壺形	外 面 黄褐色 内 面 淡褐色	あり	外面に細い刷毛目あり。底部にも刷毛目あり。内面指頭を引った痕あり。
34	1	壺形	外 面 黄褐色 内 面 赤褐色	あり	器面乾燥きで研磨。 ヒビノキ I 式の伝統を持つ底部。
34	2	壺形	外 面 黑褐色 内 面 黑 褐 色	あり	研磨する。
34	3	壺形	外 面 赤褐色 内 面 黄褐色	多し	刷毛目に底部近くだけ叩目を持つ。 内面の底部には指頭圧痕あり。
34	4	壺形	外 面 黄褐色 内 面 黑 褐 色	あり	研磨される。内面に指頭をすった痕あり。 上げ底。底怪小。
34	5	甕形	淡 褐 色	あり	黒斑あり。叩目痕一面にあり。
34	6	壺形	赤 赤 褐 色	あり	外面研磨。内部に指頭調整痕あり。
34	7	壺形	茶 茶 褐 色	多し	小さな上げ底風の底部。刷毛目に底部近くにのみ叩目を持つ。
34	8	壺形	淡 黄 褐 色	あり	尖底風の小さな平底。
35	2	甕形	黄 褐 色	多し	第16図 1 の甕形と同一個体。
37	1	壺形	外 面 黄褐色 内 面 赤褐色 黑斑あり。	あり	平底でもあるが、丸味を持って坐りが悪い叩目もあるが、刷毛目が多い。底部は貼布底で、縫ぎ目に指頭圧痕あり。

甕形土器（第35図・第36図 1）

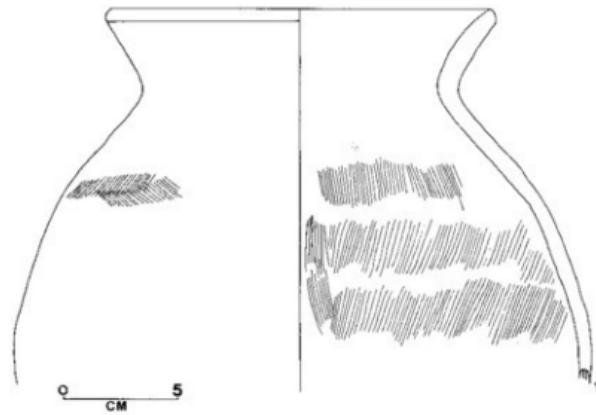
第35図の甕形土器は壺形土器といつてもよいものである。黄褐色で厚手、砂粒を多く含む。土器内面にはうすい刷毛目があるが、外面にも同様の刷毛目がある。頸部以下叩目痕



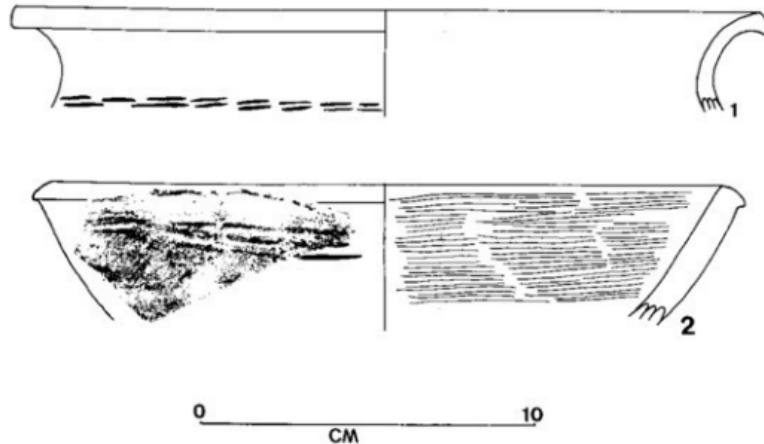
第33図 B-2区上層出土土器その2



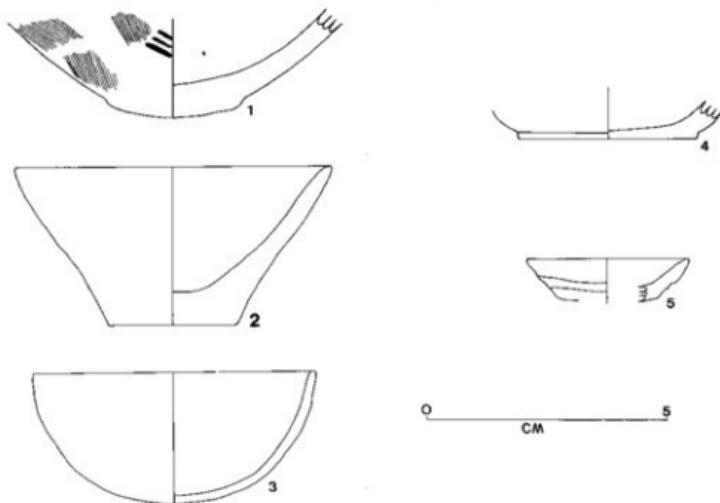
第34図 B-2区上層出土土器その3



第35図 B-2区上層出土土器その4



第36図 B-2区上層出土土器その5



第37図 B-2区上層出土土器その6

が横走するようであるが、消滅して判然としない。第35図2は同一個体の底部である。第36図1の壺形土器は、内外面ともに赤褐色、胎土に砂粒を多く含む。頭部はゆるやかなカーブを描き屈折する。口縁端はやや肥厚させる。頭部より以下に横走する叩目痕を持ち、口縁部から頭部までは無文である。

鉢形土器（第36図2）

外面赤褐色にして、内面は灰色、胎土に砂粒を多く持つ。器表には叩目痕が横走する。内面には刷毛目が横走する。底部を欠いでいるが、小さな平底の底部がつくものとみられる。

壺形土器（第37図2・3）

平底の壺形土器と丸底の壺形土器が、それぞれ一個ずつ出土している。第37図2の壺形土器は、平底のしっかりした壺形でヒビノキII式土器としては珍らしいタイプである。内外面赤褐色で、しかも窓で研磨した痕がある。砂粒は胎土中に含まれているが、その量はすくない。3の壺形土器は赤褐色にして、砂粒多く薄手である。ヒビノキII式土器の壺形土器は、このような丸底のものも出現する。

土師質土器（第37図4・5）

中世の土器として瓦器それにここに図示する土師質土器がA-2区の上層から発見され

ている。瓦器は塊の破片が発見されているが、細片で図示しがたいため写真で示した。瓦器は中世期前半—鎌倉時代のものと推定される。両面黒くいぶした薄手の塊形とみられるものの破片である。

第37図の4は土師質土器（通称かわらけ）で、器材は壺である。黄褐色でロクロ痕があり、糸切底である。5の土器は小形の壺で、赤褐色である。砂粒は含まれず精選された粘土で作られている。4・5の土師質土器は、中世後期—室町時代のものである。

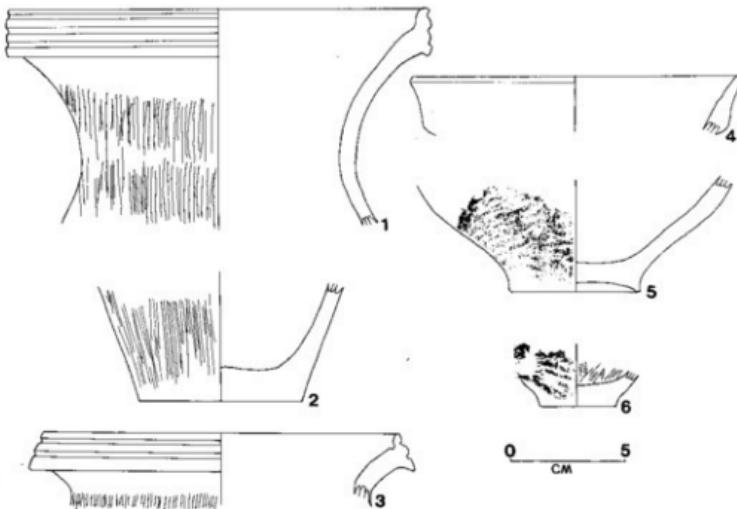
IV. 濑出土の土器

濱出土の土器群は型式的に龍河洞式土器とヒビノキII式土器に限定される。濱の発掘は地形的に広範囲に発掘できなかつたので、当然土器の出土量も余り多くない。

龍河洞式土器（第38図1～4）

濱の第2層シルト質黒色土層からのみ龍河洞式土器が出土した。1・2の壺形土器は胎土・色調・焼成などから同一個体の壺形土器のものとみてよからう。色調は赤褐色にして、口縁は漏斗状に開いている。この開いた口縁に3本の凹線文がある。頸部以下には継走する刷毛目があり、これが底部近くまでつけられている。底部は平底で内面に底部近くに簾割りの痕が残っている。

3の壺形口縁も濱のシルト質黒色土層から出土した。外面淡黄褐色、内面黒色、頸部以下に刷毛目がある。口縁端は漏斗状に開き2本の凹線文を持つ。この3の壺形口縁と接して出土したのは、4の土器口縁である。口径の小さな、そして口縁部近くを複合口縁風に作ったところは、高知県西部に広く分布する神西式土器の口縁とみざるを得ない。バーガ森北式土器も複合口縁の発達した土器であるが、この伝統を持ち無文化に一步近付いてくるのが神西式土器である。神西式土器は第V様式（古）の段階の土器で、高知県東部に広



第38図 濱内出土の土器

く分布する寺門式土器と併行関係にある。4の土器は内外面黄褐色にして、胎土に砂粒を多く含む。口縁や外反し、口縁屈折部を厚く作り複合口縁風の手法を残すところは神西式土器としなければなるまい。頸部が狭まり胴部の張る壺形土器であろう。

5・6は土器底部であるが、底部径が小さく、底部近くまで叩目痕があるところからヒビノキII式土器であることに間違いない。この2つの底部のうち6は先述した龍河洞式土器片や神西式土器片とともに、濠の第2層シルト質黒色土層から出土した。この点は濠の作られた年代を知る一つの手がかりとなる。6のヒビノキII式壺形土器の底部は、黄褐色にして胎土に砂粒が多い。底部内面には刷毛目原体による刺突文が残り、あわせて刷毛目もつけられている。5の底部はヒビノキII式壺形底部であるが、この土器は濠の第2層シルト質黒色土層のなかでもその上層から出土している。黝灰色で砂粒の含有が多い。上げ底に作っている。

第4章 考 察

以上清近丘遺跡の発掘によって明確にし得た遺構・遺物について述べたが、その結びとしてそれらの遺構・遺物から知り得た諸問題点についてなお詳しく論じたい。

1. まず今回の発掘で発見された遺構から論じたい。今回の発掘で最も注目すべき遺構は、弥生土器第IV様式の土器に該当するとみられる龍河洞式土器使用期の土塙墓群である。ただこれらの土塙墓群は残念ながら一の宮田地造成の段階で破壊され、また古くは中世末期における清近丘の開墾によってこわされているためその全貌を知ることはできなかった。しかしそれでも從来ほとんど発見のなかった龍河洞式土器期の土塙墓群とそれに伴なう壺棺墓などが明確になったのは特筆してよかろう。これらの土塙墓群は方形周溝墓の如き区画墓でなく、無区画墓である。ただこの場合問題になるのは、遺構の章で述べたように土塙墓1のような長墓と土塙墓2・3・4のような椭円形ないし方形の土塙墓をどのように把握するかである。このような椭円形ないし方形の土塙墓を成人の副葬用の短墓とみなし、当時の清近丘の土塙墓群には長墓と短墓の2つのタイプがあったとする考え方もある。またこれらの土塙墓の主軸方向等を中心に、長墓を成人用の墓とし、短墓群を小児用の墓とし、さらに乳児用の墓として壺棺墓を考える思考もある。

清近丘における土塙墓群に対するこの2つの考え方は、破壊されてわずかしか発見されなかった現況では結論の下しようもない。高知県におけるこのような遺構の発見を待たねばならない。また土器様式からみると龍河洞式土器は凹線文の發達した第IV様式併行のものであり、当然方形周溝墓の存在も問題になり得るが、これとて近い将来まで結論を延ばさざるを得ない。

土塙墓には供獻用の土器が副葬されていること、そして特に本遺跡では高環形土器が供獻用の土器として用いられていることは注目してよかろう。

2. 遺構の第二の問題として取りあげなければならないものは、竪穴状遺構と称したお多福形の平面プランを持つ落ち込みである。この遺構について、床面が一応はっきりしていること、ベット状の遺構らしいものがあること、さらに床面上からのみ台石・叩石・砥石の如き石器群が出土したことなどから、当時の生活址である竪穴式住居を考えなければなるまいし、現に筆者はこの遺構については発掘の段階では竪穴住居址と考えていた。しかし充分にこの遺構を検討していく場合に、いくつかの住居址にする難点が生じてくる。た

とえば、A) 柱穴がまったく発見されていないこと、B) 床面に炉跡の痕跡がなかったこと、C) 住居址壁面下にある排水溝がみられなかつたこと、D) 竪穴状遺構のプランが円形ないし方形でなく、従来みられるヒビノキII式土器の住居址のプランとまったく異なること、E) 床面から出土した土器が龍河洞式土器とヒビノキII式土器という時期的に相離れた土器がみられたこと。

以上のようにいくつかの難点がこの遺構にはみられ、これを住居址と断定することは困難である。そのような考え方方に立って本報告書では竪穴状遺構と呼んでいる。ではこの竪穴状遺構はいったい、何時掘り込まれ、何の用途にしたのであろうか。

この竪穴状遺構の床面上の第3層からは、先述したように龍河洞式土器片とヒビノキII式土器片およびそれに伴なう石器群が出土している。また特に重要視しなければならないことは、室町時代のものとみられる土師質土器片がわずか一片であるが出土していることである。この事実から竪穴状遺構における最下層である第3層の堆積は、室町時代のものとみられる土師質土器の時期かそれ以降の時期とみられる。それにしても第3層下部における石器群は、あたかも住居址床面に散布するが如き状況で出土している。

この第3層の堆積状況に対し、竪穴状遺構における第2層は第3層の直上にあることは当然であるが、第2層は竪穴状遺構の中央部から東部にかけて堆積し西部にはまったくみられない。西部では第3層の直上は第2層を欠いて第1層となっている。また第2層における包含の土器類は、龍河洞式土器・ヒビノキII式土器そして須恵器の甕であり、この層もいくつかの時期の土器の混在がみられるが、この層の最も時代の新しい土器は須恵器であって第3層のそれよりも古い。第2層上部の第1層はその一部が竪穴状遺構にも存在するが竪穴状遺構外にも広がっている。第1層出土の土器は龍河洞式土器、寺門式土器、ヒビノキI式土器、さらに中世の羽釜・土師質土器を含有する。

以上のような竪穴状遺構内に堆積している3つの層を詳細に観察すると、この竪穴状遺構が掘り込まれた年代は(第3層の土師質土器の存在から)土師質土器の年代に近いころということができよう。

結局B-1区発見の竪穴状遺構は、これを弥生時代の竪穴式住居とすることは困難であり、むしろ中世における開墾の際に作られた土器溜用の竪穴とみなければなるまい。土師質土器は中世の土器であり、これが竪穴状遺構の第3層に包含されていることは、これを物語るものである。この竪穴状遺構と関連してB-2区の土器溜も同様に考えねばなるまい。ただその場合B-2区の土器溜は、B-1区の竪穴状遺構の如きものは残さず、一個

所近くに土器をただ集積したものであった。

遺跡のある清近丘は、その地名からして中世名主の名からきたものの如き感をいだかせる。あるいは中世において、この丘陵を開墾した中心人物は清近であったかも知れない。その開墾の際、弥生時代の土塙墓の一部はこわされ、住居址等は破壊され、開墾によって出土した土器類は数個所に集められ、また土塙を掘り埋められたのであろう。

3. 遺構の第三の問題としてC地区に発見された濠の一部である。先述したようにこの濠は清近丘台地の舌状部の部分だけに造成したものとみられる。この濠の大きさは発掘した地区では幅2.4~4mであるが、その深さは40~50cmの浅いものである。この点この濠は防禦的なものというより、住居域を設定するためのものであり、一つは排水をも兼ねたものと考えるがよかろう。ただこの濠の作られた時期は、濠内出土の土器からして龍河洞式土器の頃としなければなるまい。そしてこの濠が埋没してしまった時期は、濠内の第2層シルト質黒色土層の上部からヒビノキII式土器が出土することによって、そのヒビノキII式土器の頃としたがよかろう。

龍河洞式土器の時期にこのような台地の舌状部にあたる所に濠を作ることは、龍河洞式土器の時期にこの台地に今回発見された土塙墓群のほかに住居址も形成された事を物語るであろう。この濠はどう考えても住居域を設定したものと考えねばならない。

4. 本遺跡から出土する弥生土器は、第III様式（新）から第V様式（新）にいたる間のすべての土器型式を網羅している。これは第III様式（新）の段階から、この清近丘において住居址ないし墓地が形成されたことを物語るであろう。今回の清近丘における発掘によつて、当時の遺構として発見されたのは、第IV様式段階の住居城を設定する濠と土塙墓群であるが、本丘陵には弥生各期の住居址も存在したであろう。しかしそれらは、この丘陵が本格的に開墾された中世において破壊しつくされたものとみられる。かかる意味において中世の遺物は本遺跡では、量は余り多くないが発見されるわけである。なお古墳時代後期の須恵器の甕が一個体分発見されているが、これはどのように解釈すべきであろうか。

図版 1



遺跡遠景

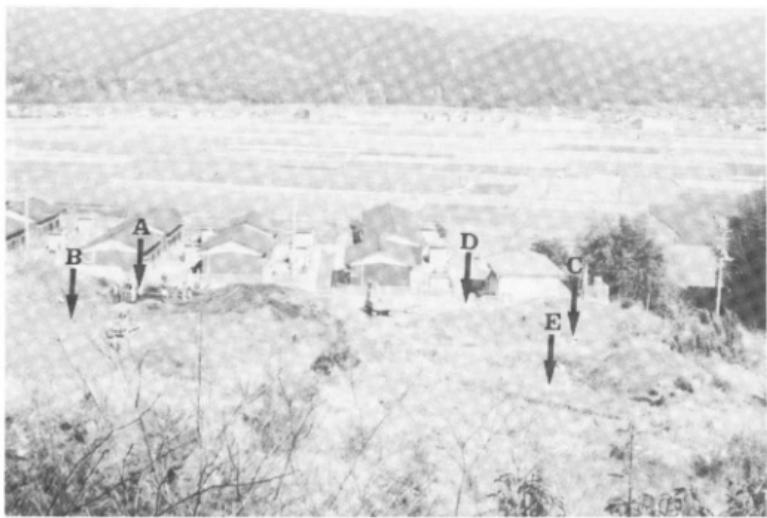


遺跡遠景

図版 2

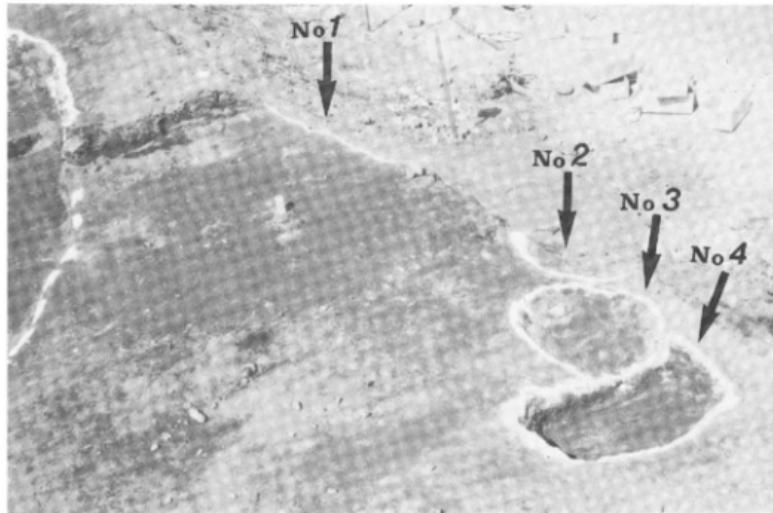


発掘前の状況



発掘区全景

図版 3

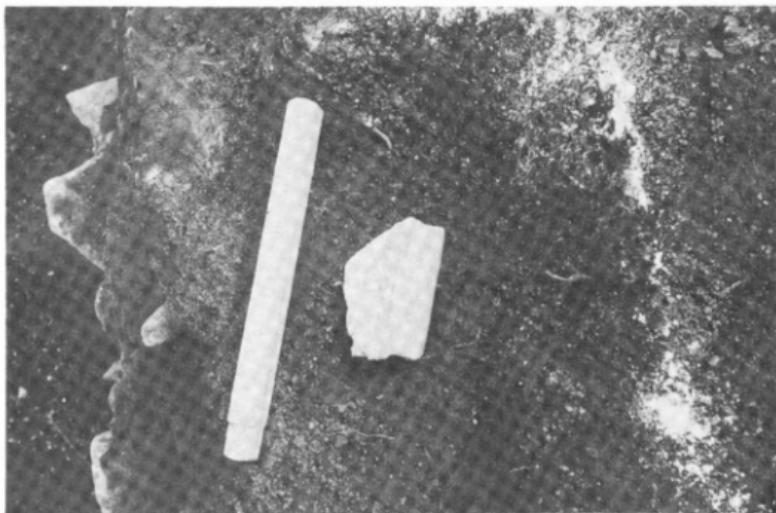


A区土壤墓群

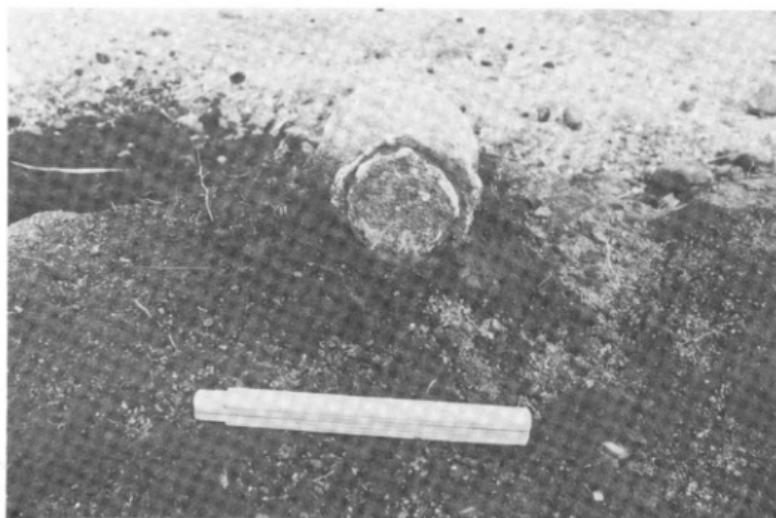


土塚墓 1

図版 4



高環形壺部破片出土状況（土壤墓 1）

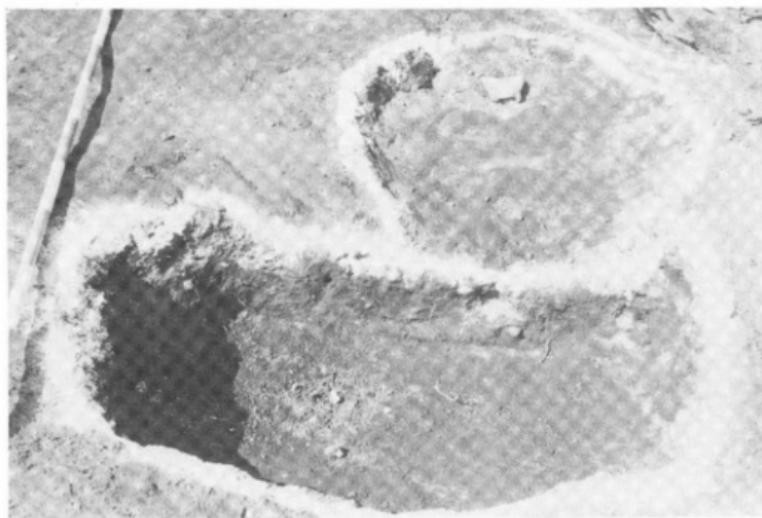


高環形土器脚部出土状況

図版 5

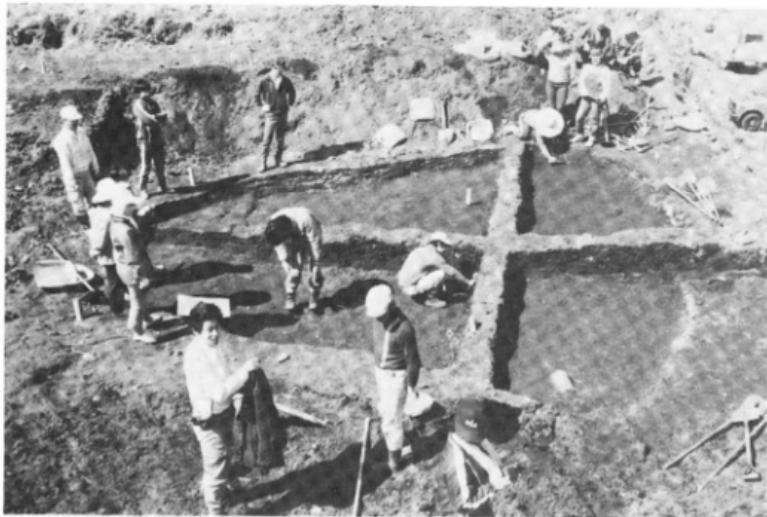


土壤墓 2・3 及び高環形土器一部出土状況



土壤墓 3・4

図版 6

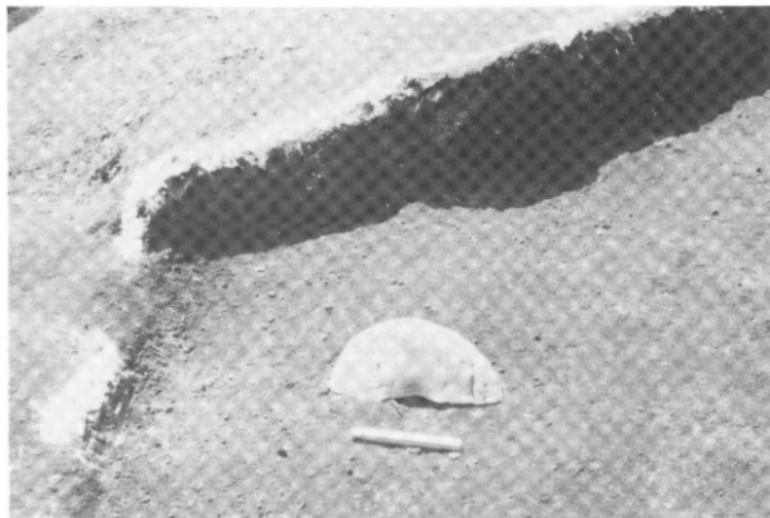


堅穴状遺構発掘状況

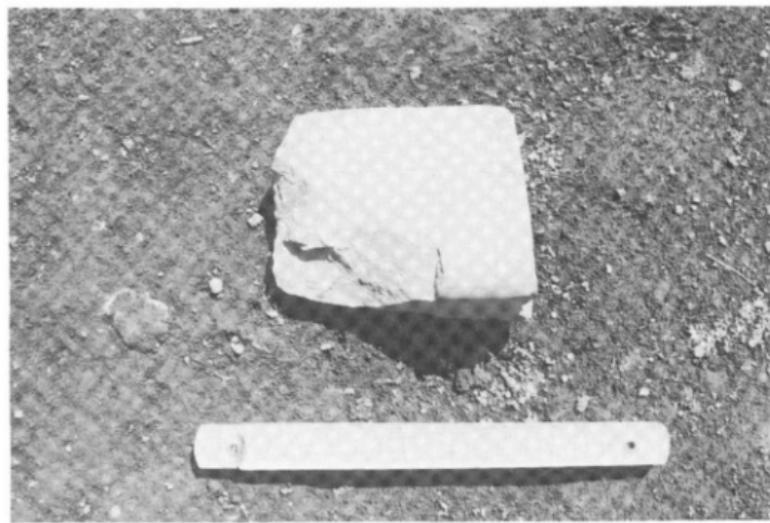


堅穴状遺構

図版 7

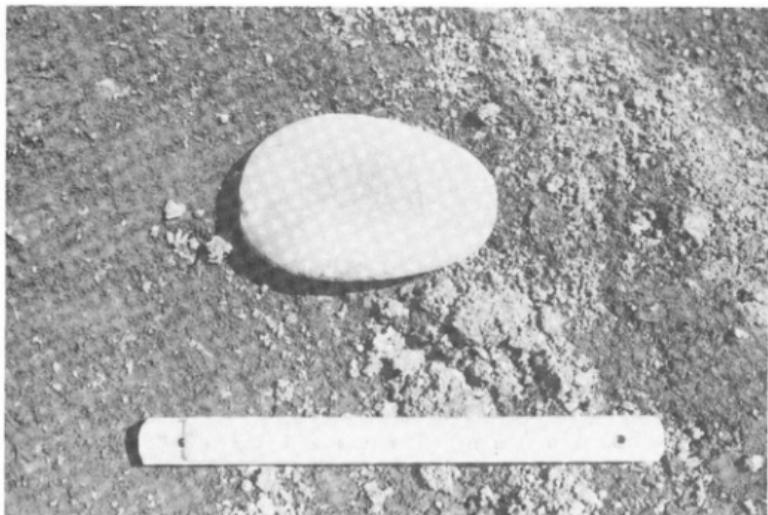


石器工作台石出土状況



砥石出土状況

図版 8

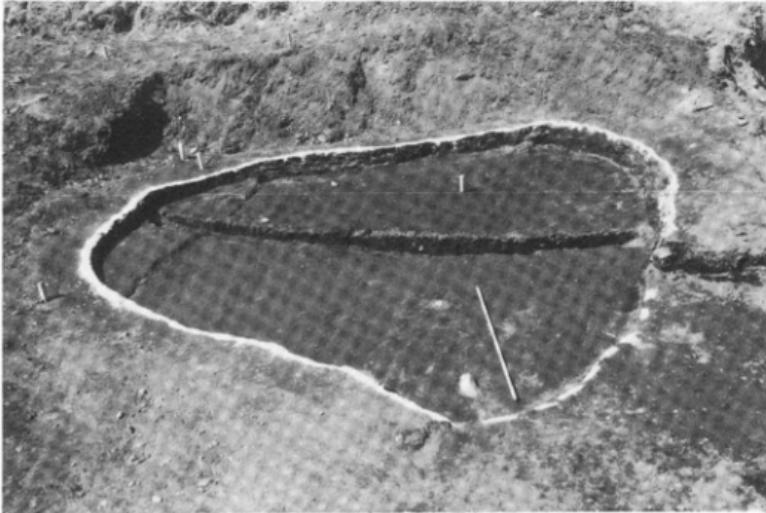


叩石出土状況



ヒビノキII式土器底部出土状況

図版 9



豊穴状遺構トレンチ調査



土壤墓群及び豊穴状遺構全景

図版10

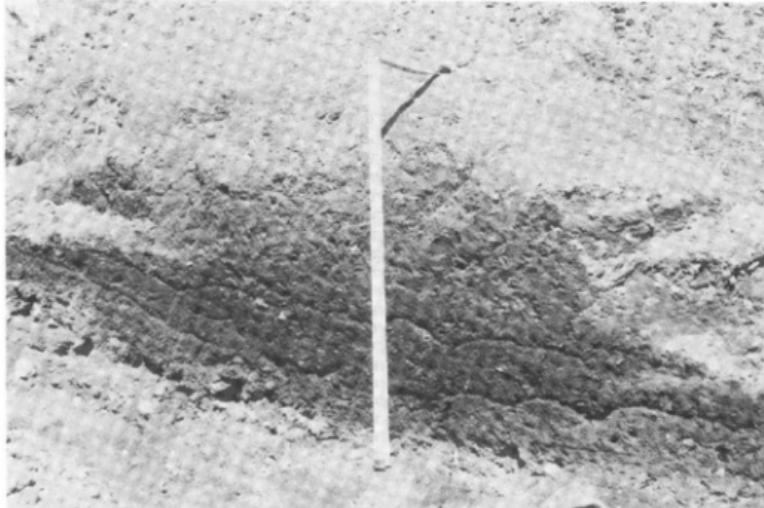


土器溜（B-2区）



土器溜（B-2区）

図版11

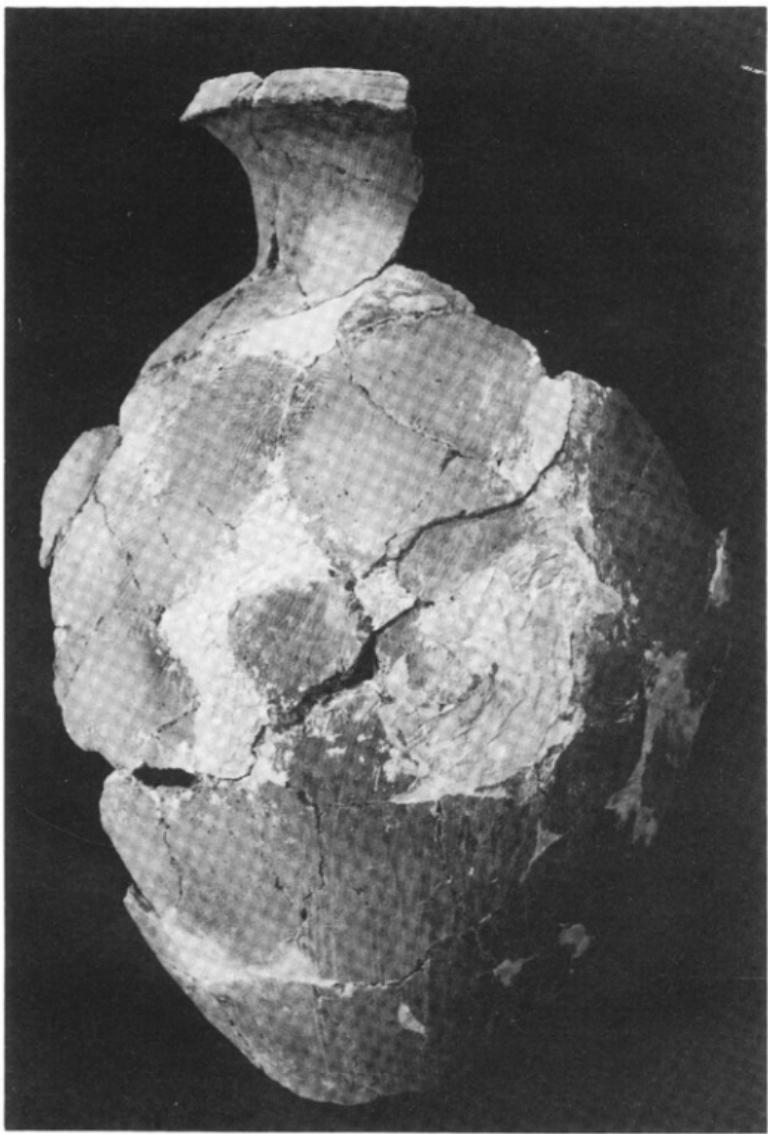


断面



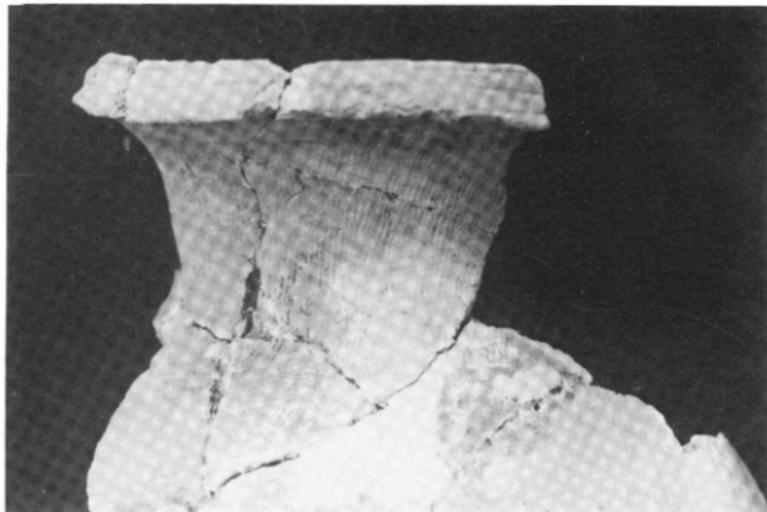
E区発掘状況

図版12

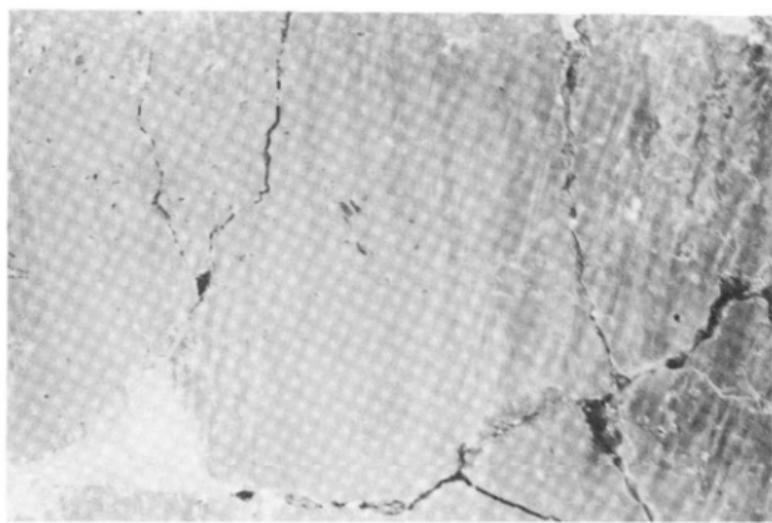


壺形土器（龍河洞式）

図版13

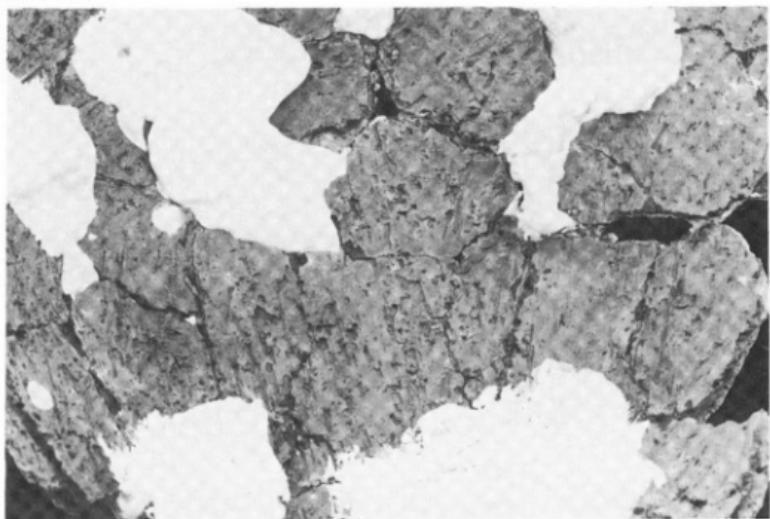


壺形土器東部

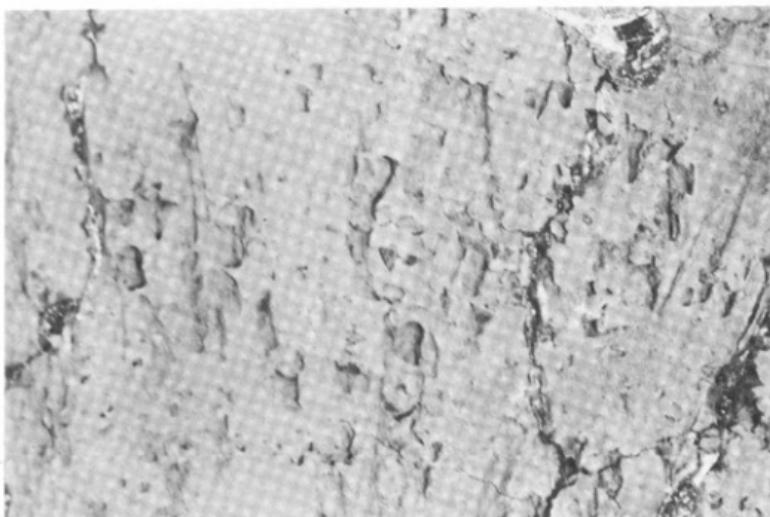


壺形土器籠みがき手法

図版14

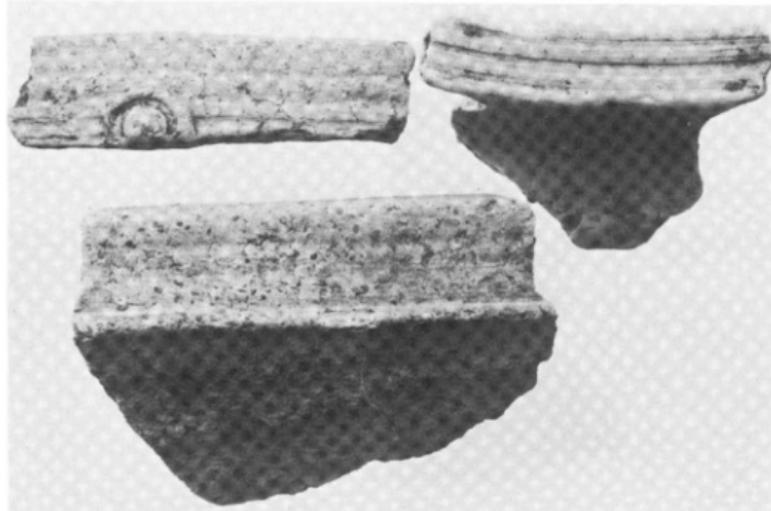


壺形土器荒削り手法

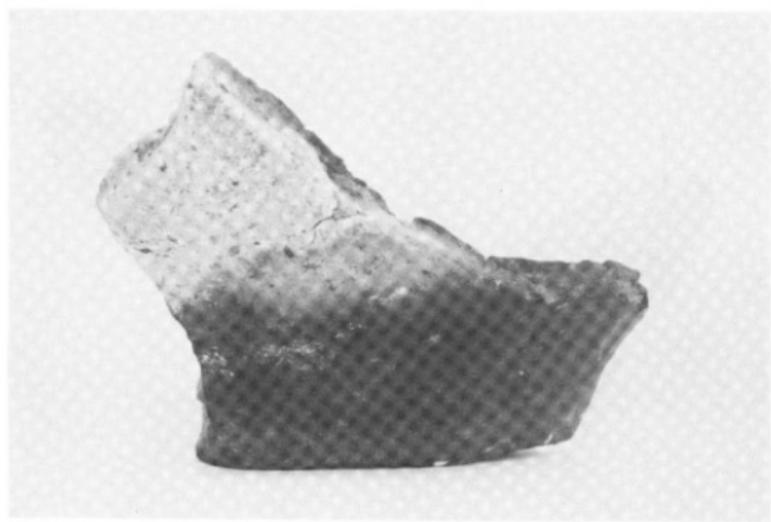


同上拡大図

図版15

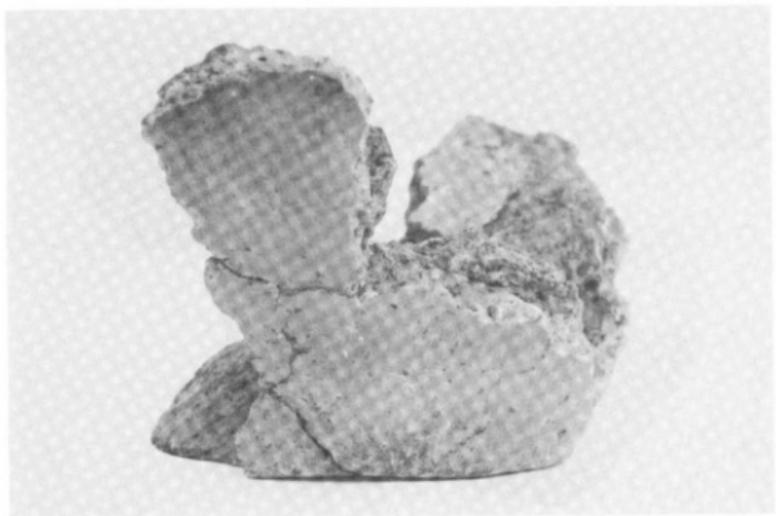


龍河洞式土器口縁部

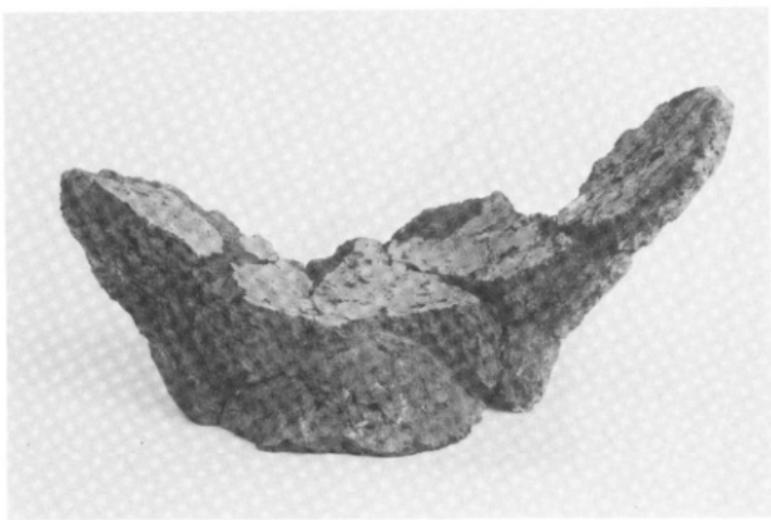


龍河洞式土器底部

図版16

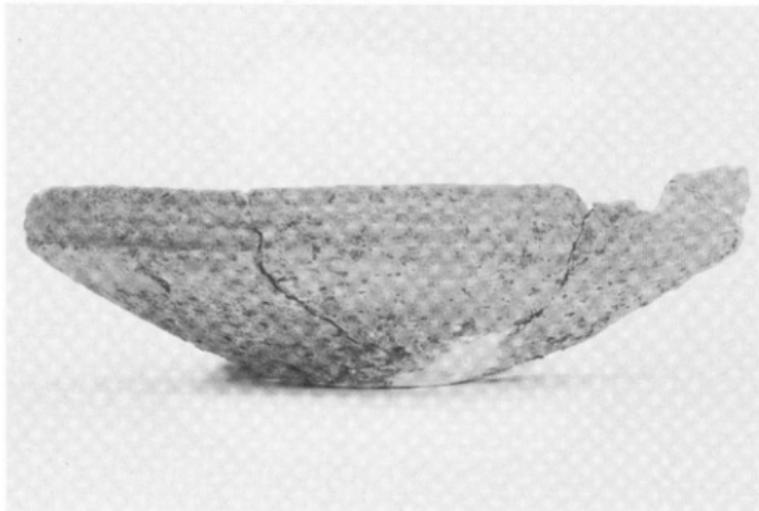


龍河洞式土器底部（外面研磨）

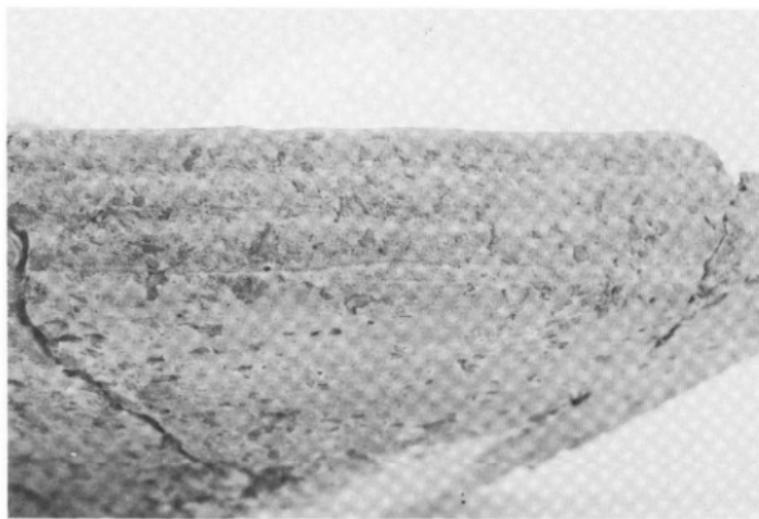


龍河洞式土器底部（内面箠削り）

図版17

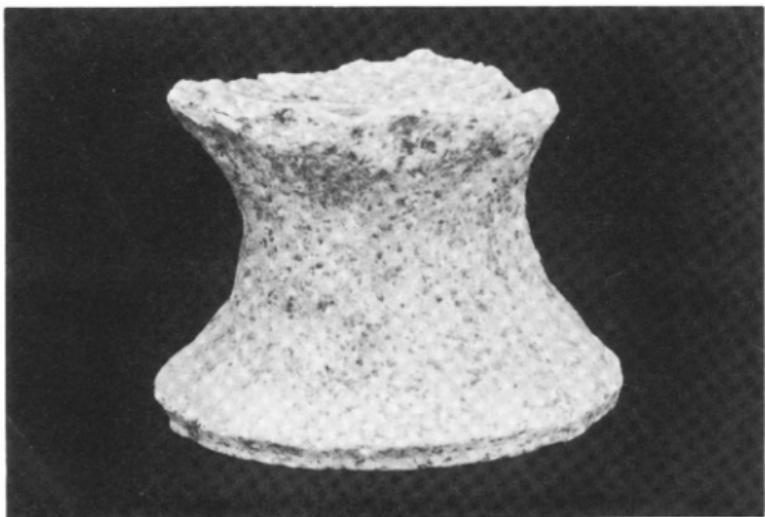


高環形土器（龍河洞式）

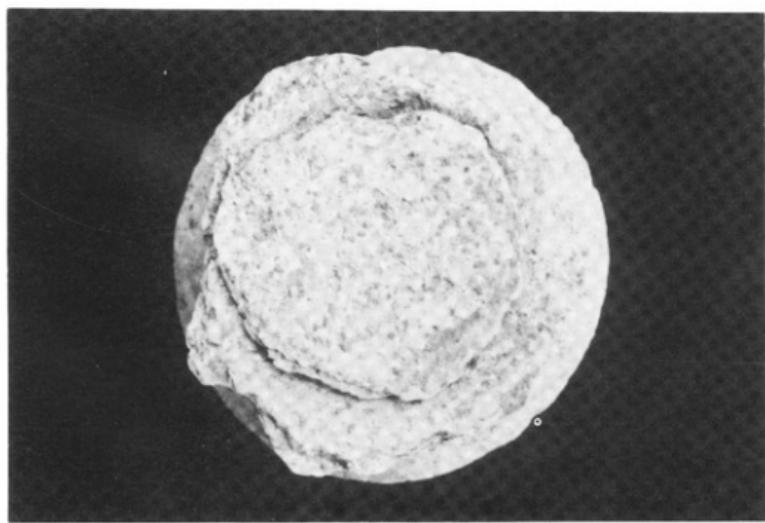


高環形土器口縁部凹線文

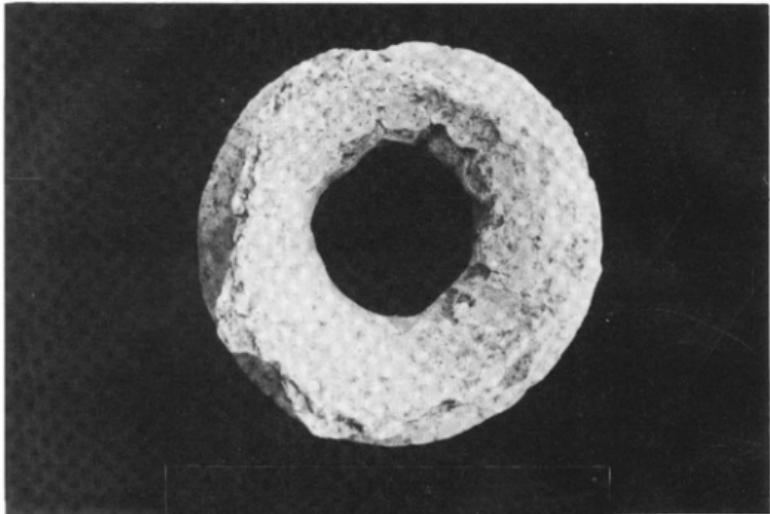
図版18



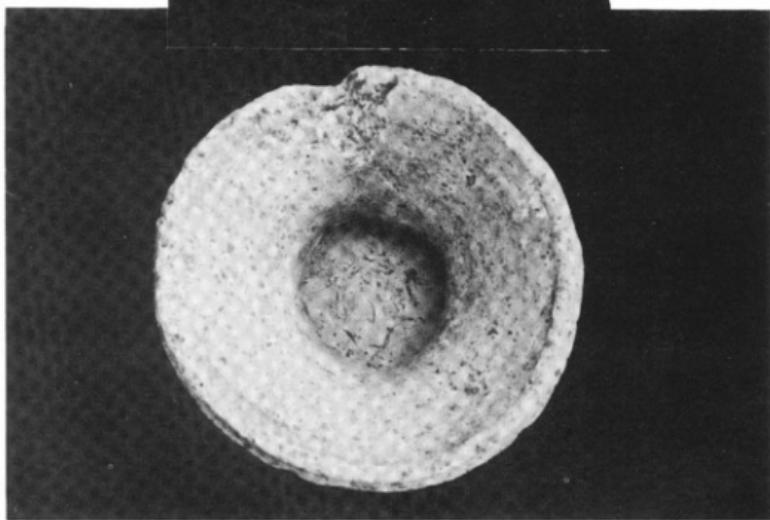
高坏形土器脚部



高坏形土器脚部（上面から）



レンズ状円板



レンズ状円板（中央）

図版19

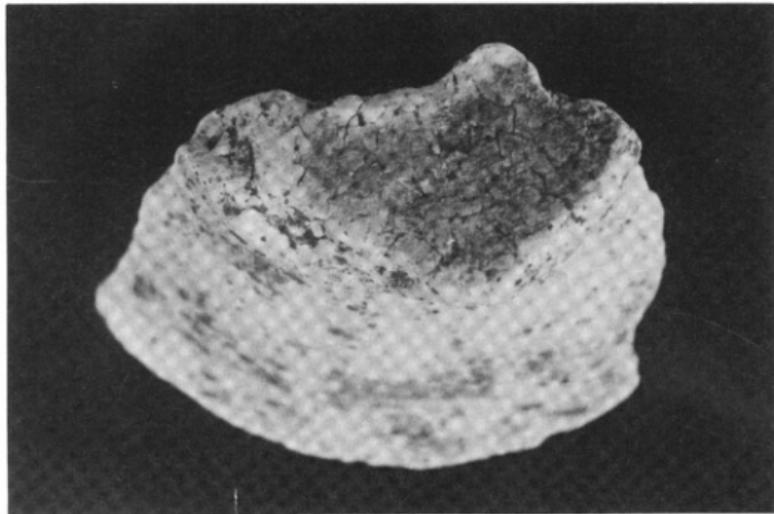


高环形土器脚部（土壤墓 3 出土）



高环形土器脚部横面

図版20

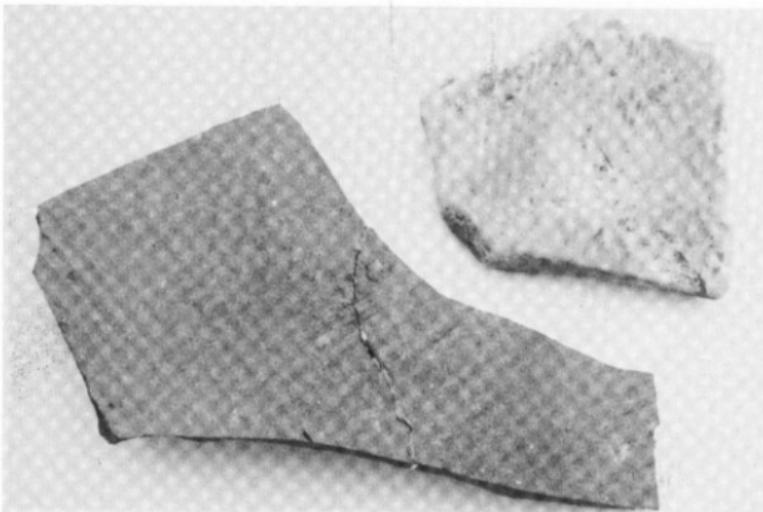


高环形土器脚部上面

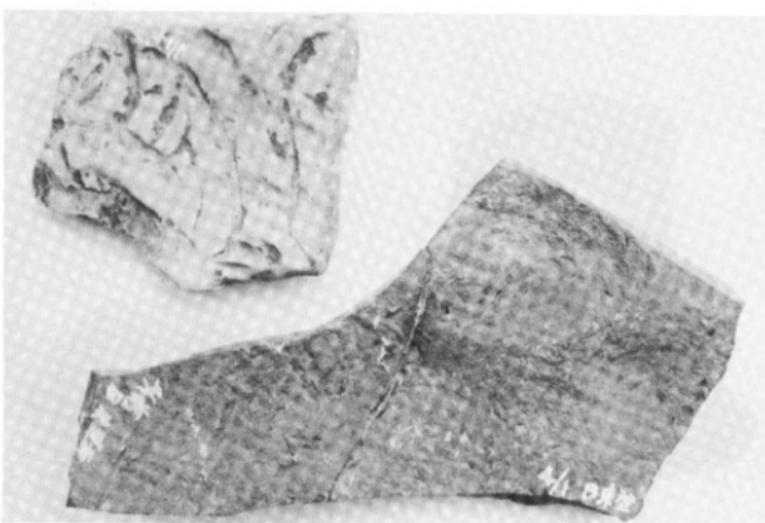


高环形土器脚部（ヒビノキ I 式土器）

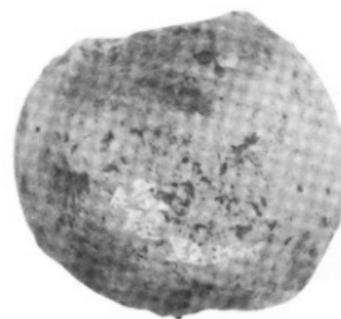
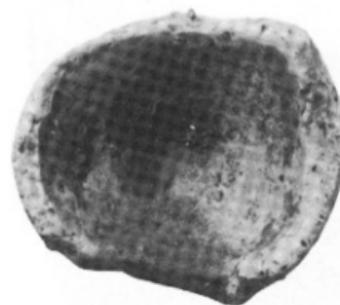
図版21



須恵器(竪穴状遺構上部出土)



須恵器内面



(粗製・小形手捏土器) 小型粗製手捏土器